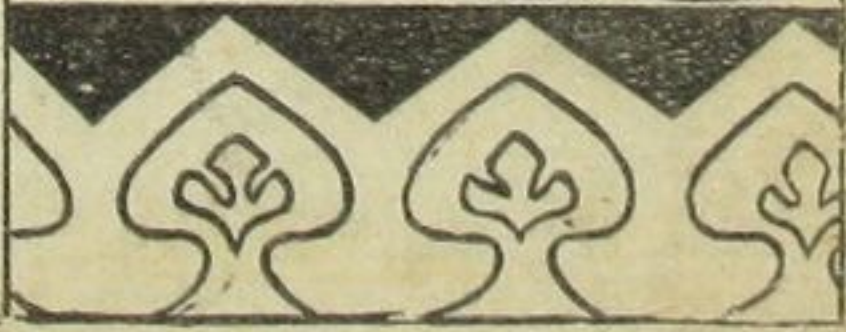


詩之朝録



野口米次郎著



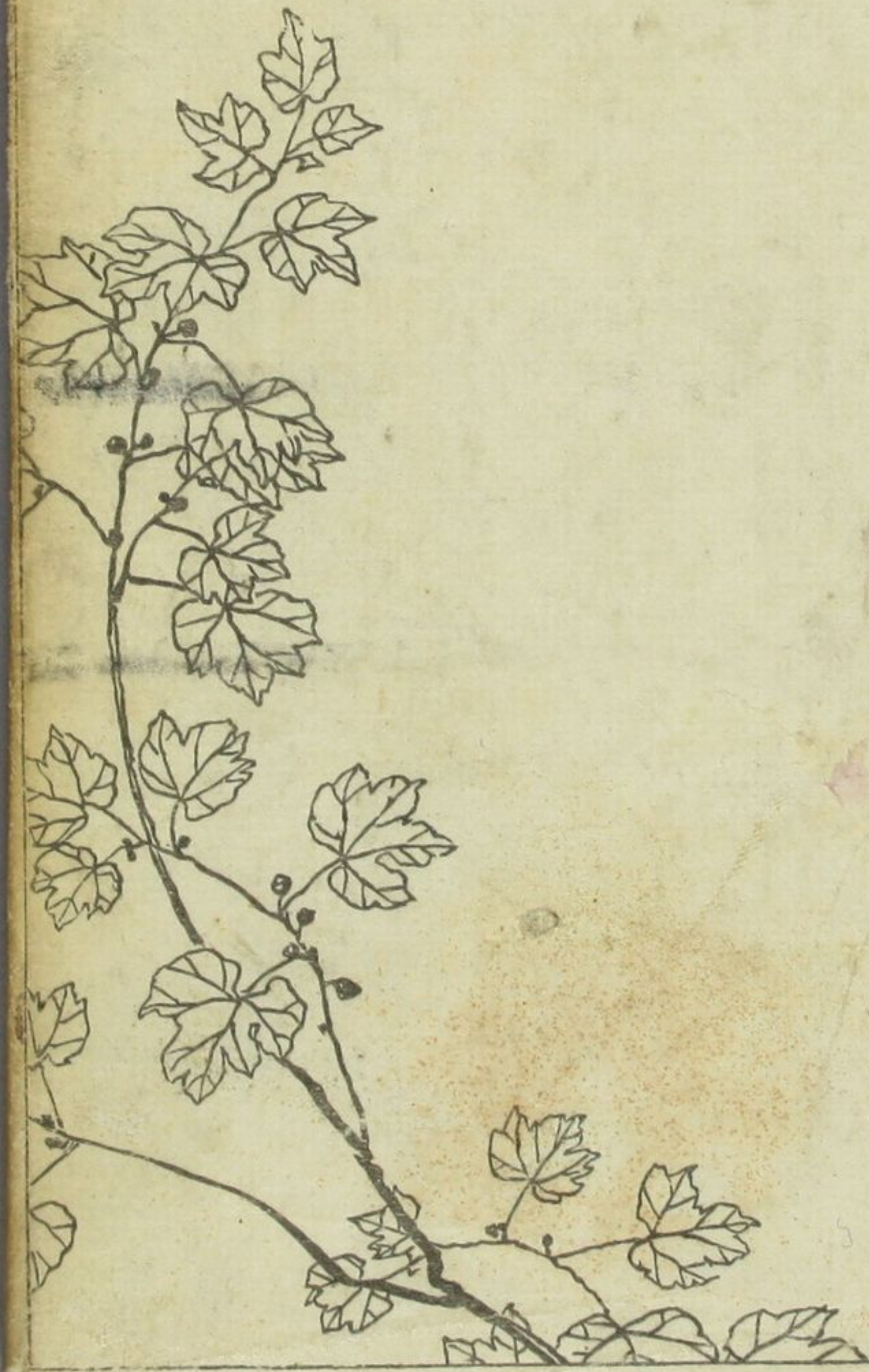


# KICHO NO KI

---

BY

❁ ❁ *Yone Noguchi.*



朝歸之詩

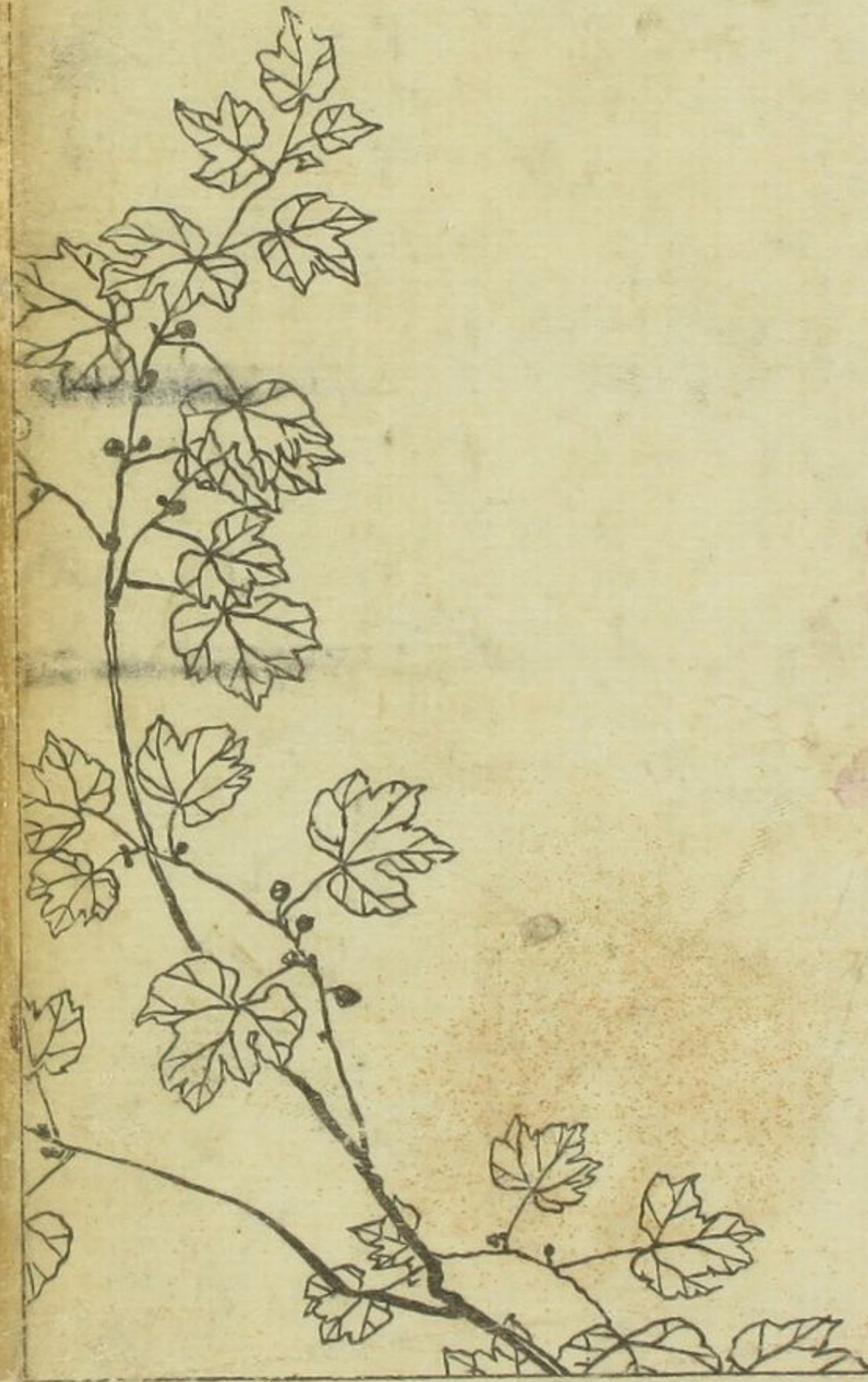


野口米次郎著

KICHO NO KI

BY

Yone Noguchi.



歸朝之詩



野口米次郎著






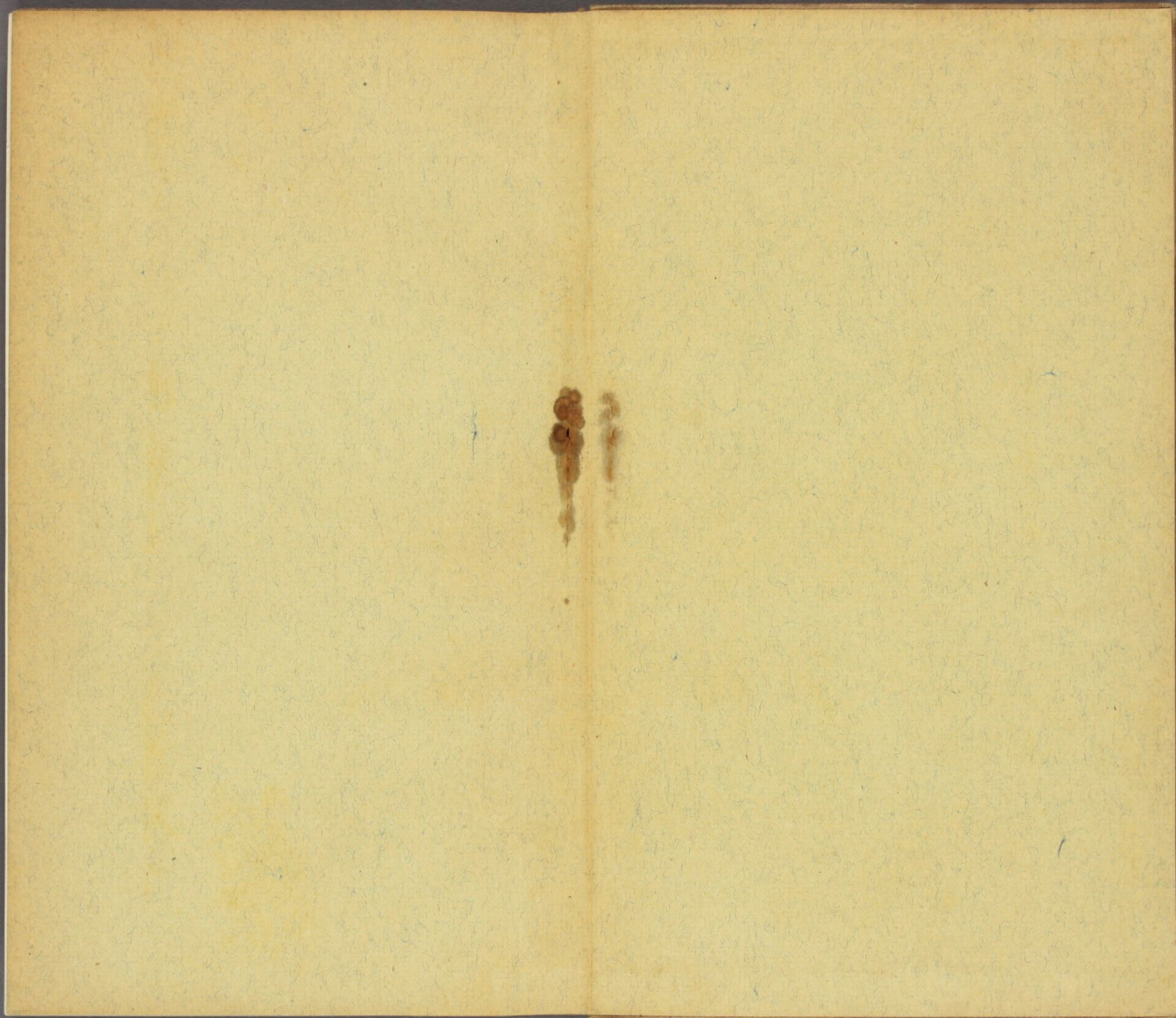
# KICHO NO KI

---

BY

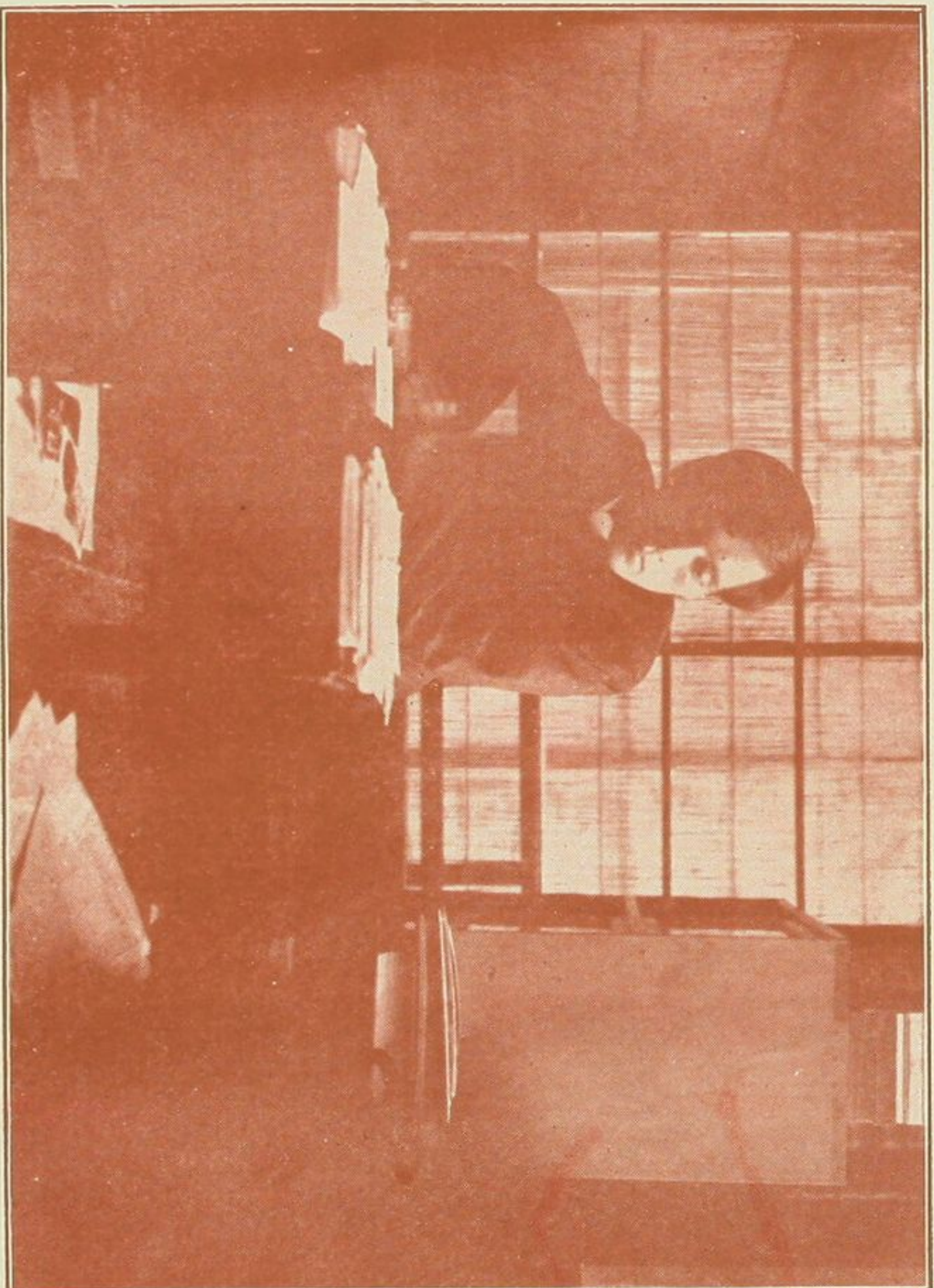
  *Yone Noguchi.*



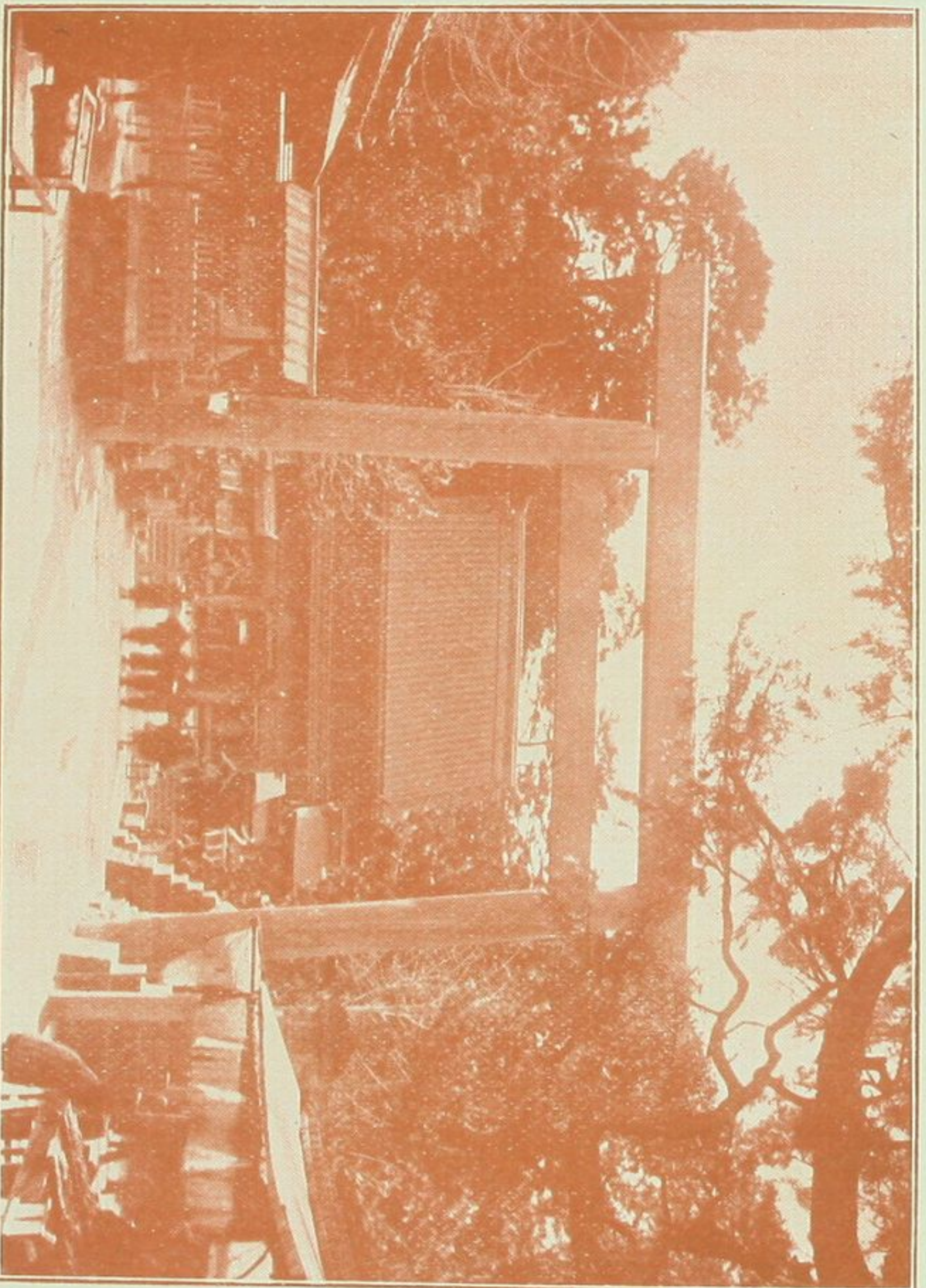




歸  
朝  
の  
記



野口米二郎氏



素盞鳴尊の祠

津島神社 (張尾)

橫行萬里君有文。天下何人不識君。句成

唇樓鮫穴旭輝麗。魚龍異樂相和聞。

嗟予此事久爲命。與君異宗而同姓。

家有萬卷讀未能。廿年身病詩亦病。

野口寧齋

寄

野口米次郎君

歸朝の紀念として謹て之を  
御兩親様の膝下に呈す

目次

太平洋上雜記	一
歸朝日記(紐育より桑港に至る)	五五
歸郷の記	七八
十六年後の郷里	八五
京都の秋	九三
奈良より	一〇四
左様なら郷里	一一一
歌舞伎座を見る	一二〇
ハーン未亡人との談話	一二七

# 歸朝の記

野口米次郎著

## ○太平洋上雜記



八月二十四日桑港夕刊新聞ブルチン其エデトリアルルページに記して  
曰く、Courage Kurapatkin! The worst is yet to come. Yone Noguchi, the young  
Japanese poet, has left San Francisco on way to the front 〆 (記者は余が取らむ  
とするマンチユリア號の解纜日を延べたるを知らずして、二十三日  
已に發せるものと思へるなり)、太平洋岸の大畫工として余の常に尊

服せるキース、パレットを側に置き余を見て微笑し且つ曰くヨ、子汝  
の詩の悪きは余の知る所、然れども——余は驚かざるを得ず實にヨ、  
子よ——クロパトキンをして逃げ走らしむる程悪しからむとは、余  
を信せよ、余は思はざりしなりと。

桑港灣頭の景は大なり世以て天下に冠たりとす、余は嘗て月の一夜  
を其處に過ごし詩一章 By the Sea を作り、岸打つ浪の音永遠に絶へ  
ずミラーが其詩に

“As leashed grey hound moaneth, moaneth,  
When the master keeps away.

Men have seen him steal in lowly,  
Lick the island's feet and face,  
Lift a cold wet nose up slowly,  
Then turn empty to his place :  
Empty, idle, hungered, waiting  
For some hero, dauntless-souled,  
Glory-loving, pleasure-hating,  
Minted in God's ancient mold.  
といへるあり余亦句あり  
Eternal organist for the souls of the land,



† † † † † † † † † †  
 『我が愛する兒よ行け、汝が取る可きの道路は汝自身能く知るなる  
 可し余何にをか言はむ、去れどヨ子余のいふ所を聞け、我が園庭の  
 薔薇は汝の有なり此處の水は清くして此處より見る所の月は常に明  
 かなり、他日久しきを出でずして再び此處に歸へり來れ兒よ、而し  
 て余は愛を新たならしめ以てライフを樂まむ其善と眞理とを味ふ可  
 し共に更により清く、更により甘き空氣を吸ひ共に此の憐れむ可き  
 セルフを解脱して理想中の道路を散歩す可し兒よ、汝の欲する所に  
 去れ、然れども歸へり來るを忘るゝ勿れ、余は汝を待つ、余は常に

人に教ふるに神を信仰し人生の美にして善なるを以てせり余は常に  
 小なる人間を大ならしめむとせり余は常に其足に纏ふ所の蜘蛛の巣  
 を取り去らむとせり余は常に大なる歌を歌はむとせり而して余は薔  
 薇と明石屋樹とを以て満足し、徐ろに死なる大沈黙場裡に入らむと  
 欲しつゝあるなり、兒よ余は汝に命ずるに幸福を獲るを以てす、汝  
 は神を信するを忘るゝ勿れ不信仰、世にも不信仰程こそ暗黒なる容  
 貌を有するはなし行けと。  
 余は斯くてミラーと袂を分ちぬ。

† † † † † † † † † †  
 已にして我が船金門灣を出でゝ太平洋上に出でぬ浪無く宛然身は大

玻璃中にあるが如し、ミラーの其大詩篇サツホ、アンドン、フェラン中に

“Such room of sea! Such room of sky!

Such room to draw a soul-full breath!

Such room to live! Such room to die!

Such room to roam in after death!”

いふあり又

“Now on and on, up, down, and on,

The sea is only grooves; the air

Is as your bride's sweet breath at dawn

When all your ardent youth is there.

And oh, the rest! and oh, the room!

And oh, the sensuous sea perfume!”

いふなり正に之れ余の云はむと欲する所のもの、余是に於て初めて身の諸物と離れて完全なる自由を得たるを覺ゆ、何等『純白の壯嚴』ぞ、此處に於て初めて其思想を十分に發達せしめ得可し意の如く其ソールを浮動せしめ得るなり、余は大洋を愛し且つ敬す、深山は余をして思考せしむるも大洋は余をして直に快活ならしむ、余は余が想像の羽翼に依りて空中に飛び雲間に遊ぶなり、余は思ふ若し佛陀にして深山に入らずして海岸に座し其教義を極めなば佛敎其物は斯くも厭世的ならざるや必せりと、深山に依りて學ぶ所の哲理は黒く、

八  
太平洋に依りて學ぶ所の哲理は白じ、余をして二週日の間世を忘れ社  
會と關係を斷たしめよ。

✦ ✦ ✦ ✦ ✦

“Such light ! Such liquid, molten light !

Such mantling, healthful, heartfelt morn !

Such morning born of such mad night !

Such night as never had been born !

The man caught is his breath, his face

Was lifted up to light and space ;

His hand dashed o'er his brow, as when

Deep thoughts submerge the souls of men ;

And then he bowed, bowed mute, appalled

At memory of scenes, such scenes

As this swift morn recalled.”

之れミラーがサツホ、アンド、フエラン中の句なり、余船頭に起ちぬ夜  
の暗黒漸次に消へ初めぬ、星の數も二ツ三ツ四ツと失せ來りぬ、已  
にして東天に微光あり、已にして東天の群雲紅色を帯び來りぬ、余  
は曉天の沈靜を身に感じぬ、神聖なる光、香氣ある光、見よ東天の  
赤日を、壯大なる光景之に過ぐる所のもの無し、余の頭は垂れぬ、  
余は神に祈りて深く感謝せり、太平洋上曉天の光景を見ざるもの未

だ宇宙の大観を見ざるものといふ可し、余は神の聲して Let there be light と命じ、光あるを見て『善』と頷けるの状を想像の中に見たり。



想像は想像を産む取り留めも無き余の想像は余の一友なるアナベル、リー嬢を顯はし來りぬ、嬢の余を動かさ迷はすこと非常なりき、嬢は盡きざる泉水の如し、余は嬢の麗色に酔ひ其才智を愛せり、余と嬢との關係は更に進歩せざりき、又退歩もせず、恰も何處へ行くといふ目的無くして迷路に彷徨せるの有様なりき、嬢は一種のパズルなりき、最も親愛なるパズルなりき。余は今日檣上に於て嬢を想像して樂めり。

余は嬢をボストン市に於て初めて識れり、余は一寶玉を獲たるの思ありき、嬢は櫻花を照らす日光の如く顯はれ來り、余は嬢を思ふ毎にポーカ詩中のアナベル、リー (Anabel Lee) を思ひ、余は嬢は詩中のものと等しとは言はざるなり然れども余に興味を與ふるの點に於て相同じ、否な嬢は更に詩中のアナベルより趣味多し、嬢の小なる面嬢の白き指、嬢の豊富なる毛髮——時にはポンペドアに結びき——一として余を動かさざるは無かりき、余は嬢を戀しき——清き意味に於て、余は今日に至るも嬢を戀しつゝあるなり、嬢は確に余と共に此甲板に座して波濤の音を聞きつゝあるなり、嬢は其可憐なる首を余の肩に垂れ掛けて愛嬌ある眼を以て横さまに余を熟視しつゝあ

るなりと想像する。

余は嬢を終日眺め居るも終に厭きたること無かりき、余は嬢のことを思ひつゝ余の性情は益々生長しつゝ行けるなり、嬢の性格は強激にして愛に満てり、余は悲しき日に於ては嬢に依りて慰さめられたり樂きの日に於ては、余は嬢に依りて其樂さを増されたりき。余は時としては嬢は米國のものにあらずして日本人なりきと思へり、余嘗て某日本雜貨店に於て一陶器を見たることありき、其陶器には一處女の畫かれたるあり、嬢が夕景身をソファの上に横へて今しがた迄讀み居たる書物。嬢は詩を愛しきを側らに投げる様の如何に其陶器の畫に似たるよ、余が嬢を日本のヤングレデーなりとい

ふも理無しとせず。



余はシエレーの詩『雲』を讀めり。

余は彼の詩を愛讀す余は特に彼の自然を歌へる所のものを愛讀するなり、彼が自然の詩を讀むで初めて彼の性格を解し得るなり、彼は『變化』と『不定』を愛せり、彼はウオヅウオスの如く自然に對して一大信仰を有せざりき、其有せざる所は則ちシエレーのシエレーたる所、彼の想像力や奇にして奔動せり、彼は自然を愛せし所の詩人にして自然を敬せし所のものにあらず、彼が『變化』と『不定』を愛せしは彼が想像力の徒に富饒なりしに依る、彼は理想詩人中

の最も理想詩人たるのものなり。

彼の性格は『雲』の一篇に依りて明に完全に説明せられたり其詩中の句 “As summer clouds disburthened of their rain は彼の性格なり。

“ I silently laugh at my own cenotaph,

And out of the caverns of rain,

Like a child from the womb, like a ghost from the tomb.

I arise and unbuild it again.

は彼の全斑をいへるなり、彼は感情の詩人にして理想の詩人にあらず I change, but I cannot die の一句は彼が靈魂の不滅を側面よりいへる所のものか。

實に洋上に於て研究、否な樂じむ可き所のものは『雲』なり洋上に於て讀む可き所のものはシエレの『雲』なり、雲の集りては散じ散じては又集るの狀之れ宇宙の大眞理を説明しつゝあるにあらずや、變化の中に不變を説明す、雲に於てのみならず波濤の狀を見よ、其等じと見ゆる状態の中に千百の變化あり、千百の變化の中に其状の等じきを見る、大洋を渡りて此宇宙の眞理を今更の如くに感せずむばあらず。



余ミラーが詩篇サツホ、アンド、フェロン Sappho and Phaon を通讀す、ミラーは舊約全書の創世記を詩的に了解し之を説明せむとせる人なり、

太平洋を歌へる所の詩人は古今東西を通じてミラーを一人なりとす、  
 而してミラーは之に依りて其天才を縦横に發表せり、彼は神が光を  
 呼び出せる前に『愛』を造れりとして氣炎萬丈、嗚呼愛の世なる  
 哉、愛無くむば神が一週日を費して造れる宇宙も更に活動せざる可  
 し、ラブは天地の生命なり、血なり、ミラー歌ふて曰く

“ Illuming love ! What talisman !

That Word which makes the world go round !

That Word which bore worlds in its plan !

That Word which was the Word profound !

That Word which was the great First Cause.

Before light was, before sight was !

I would not barter love for gold

Enough to fill ship's hold,

Nay, not for great Victoria's worth —

So great the sun sets not upon

In all his round of earth.”

日本には自然の詩人なしとせず、然れども余は愛の詩人あるを耳に  
 せず——大なる意味に於ける愛の詩人出でざる可からず。



余は想起す。

一日アナベル、リーは余を見ていひぬ、『汝は常に夢想場裡に生活する

なり故に汝は音楽を耳にするも僅に其半を了解するを得るなり、汝は常に林中を彷徨して影の如き婦女に會遇し其聲の美なるを喜ぶも何故に林中を彷徨するや又其婦女の何を意味するやを解せざるもの如し、汝の靈魂余は遂に覺醒する能はざる可し。余は『然り』と答へぬ。

アナベルは『汝は幸なり、汝の眼には青白の海日光を受けなば火の如く燃ゆると見ゆ可し』といへぬ。

アナベルは『汝の耳には海水岸を打つを聞かば其聲は則ち火の聲なりと思ふ可し』といへぬ。

アナベルは『汝は山上の空氣に觸れなば火に觸るゝが如き激情を發するなる可し汝は常に夢想場裡に遊ぶが故に』といへぬ。

アナベルは『汝若し山上に孤立せる一松樹を見なば其松樹は火の聲を發して春の歌を歌ふと思ふなる可し』といへぬ。

アナベルは『汝は深夜突如として眞理を思ひ起すことある可し而して其眞理は火の如き赤色の衣服を纏ふと見ゆらむ、汝は夢想場裡にあるが故にライフは眞に敏活にして激動してあるなりと思ふべし、

期せよ汝は夢想場裡にあるを、故に汝はライフの意味を了解せりと思ふも其半ばを了解せるのみなり汝は天地の悲劇を見たりと思ふも

唯だ其半ばを見たるに止まる、汝は萬物を了解せるにあらずして萬物を感觸するなり、汝の感觸力や驚くべきものなり、汝は幸なり、



汝は諸物を美化す」といへぬ。  
然り余は今、甲板上に於て、夢想場裡にありて波濤の聲を聞きつゝあるなり。

親愛なるアナベル、今何處にかある。



乗客中に清人の傳教師あり常に優然として椅子に横はりて聖書を讀む、余之を借りて讀む、今其第一頁に見よ。

『元始時。神創造天地。地乃虚曠、淵面晦冥、神之靈覆育於水面。』

神曰、宜有光、即有光焉。神觀光爲善。』

之を日本文字のバイブルに比較せば其文字如何に大にして其意味の

確然たるを見む、日本文字は常に其意義漠然として大なる所無し。



余トランクを開いてアナベル、リーの手紙數箇あるを發見せり、之を披いて見る其一に曰く、

「ヨ、子汝は余の近況を問へり、汝は未だ余を忘却せざるか、余は常に汝は昨日の友を今日忘れ明日又新しき友を作る汝の好む所の人、

汝の好む所のものは一抄時間毎に變ずるなりと思へり、

『余は朦朧たる夢を夢み常に片影を捕へむとするなり、余は毎日灰

白色なす空想の宮城を造る、而して其宮城は夕景に至らば一の音だ

も發せずして毀破し去らるゝなり、然り夕方七時頃に、而して余は

二二  
明日再び同じき宮城を造り初むるなり、余が如何に今日を過ぎつ

つあるかを想像し玉へ』と。  
親愛なるアナベルよ、其宮城の壊滅せられざる前余をして汝が空想  
の宮城に入るを許せ、而して汝と對座して閑談するを得せしめよ。

海上は信仰を養ふ所なり先づ船長を信するより初まる、自然を信す  
可し而して後には自身を信す可し、故ヘンリーは大なる文學者なり  
と一篇 I am the Captain of My Soul は之を證明す。

群鳥戀々として船に従ひ來るあるを見る何ぞ美なる、之れ『愛』を説

明すともいふ可し、彼等は單純なるシーガルなり、シーガルといふ  
時は詩情無きも、詩人をして之を美化するを許せ、若し彼等をダブ  
なりと假定せば、『大洪水は止みたり上には青天あり』と告げたるダ  
ブなりと假定せば、一層詩情の長きものあるを見む。

二二  
大洋は余をして二箇の大人物を想像せしむ、一は往古のユリシスに  
て他は則ちコロンブス其人なり、昨冬余は紐育ガーデン座に於てユ  
リシスの劇を見たり之れ英國の青年詩人フキリプスの作れる所を演  
せるなり、余其一幕一幕を追想して樂めり、ユリシスは無盡なる自  
家が好奇心の饑を満さむが爲め海上を横行せし所のもの、之をテニ

スンに語らじめば

二五

I cannot rest from travel : I will drink

Life to the lees : all times I have enjoy'd

Greatly, have suffer'd greatly

..... I am become a name :

For always roaming with a hungry heart

Much have I seen and known : cities of men,

And manners, climates, councils, Governments,

Myself not least, but honour'd of them all ;

And drunk delight of bottle with my peers,

For on the singing plains of windy Troy.

I am a part of all that I have met ;

Yet all experience is as an arch whether thor'

Gleams that untravell'd world, whose margin fades

For ever and forever when I move.

然れどもコロンブスに至りては然らず一大目的の存するあり、共に  
其人格の高大無邊なるの點に於ては相等しミラー嘗てコロンブスを  
題して大雄小篇を草せり、倫敦アゼニアン雜誌は以て、雄壯の點之  
を以て米國の詩中第一に推せり、其最後の句に曰く

“Then, pale and worn, he kept his deck,

And peered through darkness. Ah, that night

二五

Of all dark nights ! And then a speck——

A light ! A light ! A light ! A light !

It grew, a starlet flag unfurled !

It grew to be Time's burst of dawn.

He gained a world ; he gave that world

Its grandest lesson : " On ! Sail on ! "



日露開戦以來、余の知れる詩人にして同情を日本に寄せざるは無し、  
中にエデス、トマス嬢ありて露國の爲め詩筆を用るが如し、嬢と余の  
交友は久しきに渡る、余一日書簡を送りて之を責む嬢返書して曰く、

『ヨ子よ詩人の業は人情の美を歌ふの外なきにあらずや如何に、日  
本人を能く解する詩人は日本人を借り露國を能く知る所のものは露  
國を借り以て人情の銀線をして音あらしむ可し、日本人がいふが如  
く露國は黒からず、君余を許せ、余には露國に親戚のあるありて能  
く之を知る、或は君は余を以て偏見を有すとなさむ、余は之に答へ  
じ、君が日本人の美を稱道するが如く余は露國の美を歌はむと欲す  
るなり、日露兩國人共に人間なり、兩者共に其美を有す、ヨ子よ余  
等は敢へて日本黨露國黨といはじ、唯其知る所に依りて人情を歌ひ、  
極力『戦争』に反抗せしめよ』と。  
嬢のいふ所眞に然り。

嬢は其書狀と共に一篇の詩を添へたり、則ち

二八

“ A LITTLE SOLDIER ”

A TRUE INCIDENT

It is the heart of Russia—

That heart with every beat,

An inward echo—answers

The throb of marching feet.

It is a child's first letter :

“ I send thee all my love ;

While thou dost fight for Russia,

I pray to God above.”

'Tis “ To a Little Soldier ”

That letter is addressed ;

And with it goes a packet

Of sweets the child loves best,

Of books himself has chosen,

Of warmest things to wear,

A pipe—and, yes ! tobacco ;

All tied with loving care. . . .

It is the child's first letter,

In struggling symbols traced ;

Five thousand versts it travels

The while Siberian waste !

It is the camp at Dalny,

二九

Amid the lingering snows ;  
There, to the youngest private,  
The child's first letter goes.

He reads it to his comrades—

Scarce more than boys are they ;

And half the packet's treasures

By lot he gives away.

He folds and keeps the letter,

His answer speeds afar :

“ God love thee, Little Comrade,

For comrades true we are :

One fights, one prays for Russia,

And for her dear White Czar !” . . .



余は故文豪ブレット、ハートを想ふ、加州は自ら「我がハート」と云ふはハート幼少にして加州に來り初めて加州の文壇に顯はれ異名を天下に馳せたるに依る、嗚呼ハート加州を去りてより加州の文壇更に振はず、ハートがラーバランド、マンスリーを發刊するや時にスタミード、并にクールブリス嬢等ありて之を助け米國文壇の異彩と稱せらるゝに至れり、今日同雜誌ありと雖も之を編輯する所のものは平凡の人、徒に昔日を追想せしむるのみ、余甲板に於てハートが處女作の一なる Luck of the Roaring Camp を讀み涙の垂るゝ思あり、

ハートの筆や大なり壯なり血あり涙あり、今日幾千百の日本人加州にありてハートが其小説中に畫けるの所に散在せるもハートの名を知るもの無く又其作を知らず。



余は已に余の友人アナベル、リートを思ふ毎にポーの詩アナベル、リートを思ふといへり、余嘗てアナベルにいふ。

『アナベルよ余をしてポーの詩と汝とを比較せしめよ、汝は詩中のアナベルの如く確に今日のものにあらずして幾百十年以前に生存せし少女とのみ思はるゝなり、之を別言すれば汝の年齢は幾百十歳なる可し、知らず汝は余を愛し余に愛せられむが爲め生存しつゝあり

や否やを、ポーの詩中のアナベルは愛し愛せられむが爲め生存しき假に余等——汝と余——は相互に戀し、戀より更に大なる『戀』を以て戀しつゝありしと假定せよ、知らず空中の天人等は余等を嫉むや否や、然り余は私に一夜天上より雲の來るありてポーが詩中のアナベルの如く汝を冷殺せむを恐るゝなり、然り余は私に汝の親族の來るありて汝を誘ひ而して海邊の一國にある墳墓に幽閉せむを恐るゝなり、余等の戀は大なるなり、何物か能く余等のソールを離隔せしめ得む、余は月を見ては汝を思ふ可し必ずや星は余に取りては汝の清き眼と見らる可し、余は海邊の一國にある墳墓に座し汝と共にあるを以て樂しとするなる可し、海濤の聲は余の悲哀を増すなる可し、

アナベルよ余は悲哀を愛するなり、余は余の悲哀を海濤と連結せしめむと欲するなり、海濤は余に取りては悲哀のシンボルと思はるなり、余は常にいへり悲哀の色は海濤の色は海濤の色如く緑色なりと、左に  
あらずやアナベルよ」と。  
今日船の甲板に座して海濤を見其聲を聞く尙ほ余が悲哀の色を見其聲を聞くの思あり。  
知らず余の悲哀太平洋の如く深緑の色を供へ其聲の如く深淵なるものなるやを。



船の布哇に入るや先づモロカイ島を見ると聞く、不幸にして吾人が  
船は夜に入りて布哇に近づけるを以て之を見る能はざりき、モロカイ島を想ふ毎に余は千古の偉人ダミアンを追想せずむばあらず、ダミアンは加特力教の僧侶にして單獨同島に群居せる癩病人の間の布教に熱心し遂に同病の犠牲と成りて死せるなり、其事や早や殆ど十年以前なり、天下爲に痛哭せり、スチブソン、スタミードの徒健筆を振ひて其偉業を天下に紹介せり、ダミアンの業何ぞ大膽にして獻身的なる十九世紀末路の一大マタイアは彼れ、ミラー嘗てダミアンを哭して歌ふ、

“Far under the fire-sown path of the sun

He sleeps with his lepers ; but a world is his !



His great seas chorus and his warm tides run

To dulcet and liquid soft cadences.

And, glories to come or great deeds gone,

I'd rather be he than Napoleon."



遙かにサモアの天を見て故文豪スチブソンを想ふ余はスチブソンの詳細を其夫人目下、桑港に住居せりより聞けり又ストロング夫人(スチブソンの娘)よりも之を聞けり、スチブソンの最愛の孫たりしヲスチン(トロング夫人男)は余が親友の一人なり、余は常にサモア島洋濤高き間に孤立せるスチブソンがモニユメントの側に一夜

を明かしたく思へり、スチブソンが偉名は太平洋と共に不死なる可し。



“Fair land of flowers, land of flame,

Of sun-born seas, of sea-born clime,

Of clouds low shepherded and tame

As white pet sheep at shearing time,

Of great, white, generous high-born rain,

Of rainbows builded not in vain—

Of rainbows builded for the feet

Of love to pass dry-shod and fleet

From isle to isle, when smell of musk

'Mid twilight is, and one lone star

Sits in the brow of dusk."

此れミラーが布哇を歌へる所の句なり。  
雑花笑ひ椰樹高く拂ふ年中暑くして人民半ば眠るの状なり、余の一  
友曰く一年此地にあるや善し、二年此地にあるも亦善し、三年此地  
にあるも敢へて悪しからず、然れども三年以上此地にありて他國に  
移らば其人は自ら其不適當たるを發見する可しと、余も其言の眞實  
なるを思ふなり、熱くして不活潑なる布哇は人をして睡眠せしむ否

な半死せしむ、然れども旅客一度此地に來らば其花賞す可し驟雨愛  
す可し而して更に愛す可きは突如として見る空中の虹か。  
之を土人より見れば布哇國は已に滅亡せるなり、街上を歩せば彼等  
亡國の民頭に花環を戴きて、散遊し居るを見る憐れむ可きかな愛す  
べし、彼等國は亡ぶるも尙ほ花を愛するを忘れざるなり、汝土人、  
幸福なれ aloha!



千九百〇二年の正月余華盛頓にありて老爺スタミードの所謂ハンガ  
ロウにありき、時に布哇國女皇リ、ヲカラニの偶々華盛頓に來るあ  
りスタミードは女皇と親しく識れるの人、一日共に行いて女皇を見

たり、女皇は肥満活敏の人、能く談じ能く笑へり、少しも數年前まで  
陛下と崇拜せられたるの跡更に見るを得ず余が「親愛なる女皇」と  
いへるは尙ほ「親愛なるスミス夫人」といふに異ならず、余談話數  
時間に渡る女皇は已にして茶菓を命せり、其從者の中能く音樂を弄  
するの人あり、余等の爲め布哇のソングを彈せり、スタミード「ス  
ウキト、アイランド」と獨語しけるに女皇は、「否とよ、スタミード氏  
よ汝が識れるスウキト、アイランドは已に滅亡して其跡を留めざるな  
り、布哇は白人の有と成りて布哇の布哇たる所空しく成りぬ、悲し  
からずや」と言へり、スタミード一大息を發せり、女皇余にいつて  
曰く布哇の土人は體軀強大能く耕し能く動けり、然るに一日白人よ

四〇

りウキスキを飲むを學べり、又其他の害惡——最も甘き害惡を清  
人又日本人より學べり、布哇の土人は惰怠と成りぬ、余は彼等衰亡  
し行くを見て深夜眠れざることありと、不幸なる女皇、余は全身の  
同情を寄するなり。



船の乗客に清國人二百有餘名あり、彼等の汚穢言語に斷へたり、唾  
するに其處を撰ばず——彼等は一小時毎に唾するなり、朝より晩に  
至るまで喫煙し其煙草の臭氣鼻を苦しむ、彼等の活動せる時は賭  
博せる時のみ、今日甲板に於て余は二十三箇所に於て賭博せるを見  
たり、天下の慘狀之れより大なるは無し。

ジョン、タブ (John Tabb) 米國詩界に孤立せり彼の逸品たるは人の許す  
 所なり、彼は加特力宗の僧侶なり、メリランドに於ける同宗校に教  
 鞭を取る余嘗て余の詩篇を贈り批評を乞へることあり、氏返書して  
 曰く余は常にグラス製の家に住するものなり人をして余の家に石を  
 投ずるを許さず又余も亦石を他の家に投ぜざるなりと、蓋し批評云  
 云を欲せざるなり、余の友人嘗つて氏を晚餐に招げることありき、  
 余の友人は氏を招待せると共に二三の人をも招けり、氏突如として  
 入り來り二三の人あるを見て一言の發すること無く辭し去りて又歸  
 らざることありき、氏の奇行斯くの如し、人を見るを欲せず、然れ

ども一度氏を知るや氏の如く其情の親愛す可きものあるを見ず、氏  
 の作る所の詩篇は日本の發句を泰西化せるもの、片言の中に無盡の  
 情を入るに妙を得たり、二三行の中に想像の花を宿らしむ、思ふに  
 米國詩界中の最も稀に見る所の詩人なり、今其一例を掲げむか The  
 Mid-Day Moon なるものは則ち

Behold, whatever wind prevail,

Slow westering, a phantom sail—

The lonely soul of yesterday—

Unpiloted, pursues her way.



余は好むでフォースチン、ドブソンを讀む、彼は批評家として名あれど余之を知らず、余の氏を知れるは詩人としてなり、氏はブラウニンが所謂 breathe through silver の徒、氏を稱して『夢中に夢みる人』なりといふこと能はざるも亦氏は born out of his due time の人たるなり、氏は詩章を研磨すること茲に四十年、好むで輕妙なる詩章を作る世評して佛蘭西派なりとす、其詩句の完全英麗なること天下に比なしか、佛蘭西派なりといへども之れ必ずしも其詩句の徒に輕快にして不眞實なりといふにあらざして其詩章の正直なるは世之を知る、而して其正直なるは十八世紀の正直にして氏は好むで其時代の風潮に浴せるなり、其風潮とは禮儀を重じて風流を樂めるをいふ、氏は實

に其時代の gracious ease and leisurely indolence を喜べるなり、假令氏の詩章は人をして或は直に喜ばしめ或は直に怒らしむるの力なしと雖も人をして讀むで一種不可思議の殿堂の中其精神を他界の空氣中に浮動せしむるの魔力あるなり The Ladies of St. James's の一章は天下に名高し “when breezes blow at morning” 或は

“It trembles to a lily,—

It wavers to a rose

の句は頗るアカ抜けのしたる逸品なりとす “A Gentleman of the Old School を讀まば beauty of time and mellowing hours, and a not unwise indolence に情越に擊れざるを得ざるなり、今其最後の句を摘載せむか則ち

Lie softly, Leisure ! Doubtless you  
 With too serene a conscience drew  
 Your easy breath, and slumbered through  
 the gravest issue ;

But we, to whom our age allows  
 Scarce space to wipe our weary brows,  
 Look down upon your narrow house.

Old friend, and miss you !



ウキルリアム、ワトソン（William Watson）は天才なり、氏はウラヅウラ

スを崇拜して時にウラヅウラスの單純の域に達せずと雖も亦ウラヅ  
 ウラスの如く時として駄作あるを見ず、ワトソンに至りては嘗つて  
 Bothos に入りたること無し常に威嚴と情緒を紳士的に説明して現今  
 英國詩人の模型たり、人氏を非難して冷酷なりといふと雖も其は氏  
 は好むで『政治的詩章』を Purple East 或は Poems on Public Affairs に草せ  
 しに依る、然れども人にして氏の處女作にして且つ大作たるウラヅ  
 ウラスの墓地に寄せたる所のもの亦氏の叙情詩を讀まば熱淚ある詩  
 人たりとなす可し、今 The Hope of the World and of her Poems を翻譯さむか  
 Ode in May あり余をして之を摘載せしめよ、

What is so sweet and dear

As a prosperous morn in May,  
 The Confident prime of the day,  
 And the dauntless youth of the year,  
 When nothing that asks for bliss,  
 Asking aright, is denied,  
 And half of the world a bridegroom is,  
 And half of the world a bride ?

\* \* \* \*

For of old the Sun, our sire,  
 Came wooing the mother of men,

Earth, that was virginal then,  
 Vestal fire to his fire.  
 Silent her bosom and coy,  
 But the strong god sued and pressed  
 And born of their starry nuptial joy  
 Are all that drink of her breast.  
 And the triumph of him that begot,  
 And the travail of her that bore,  
 Behold, they are evermore  
 As warp and wept in our lot.

We are children of splendid and flame,  
Of shuddering, also, and tears.

Magnificent out of the dust we came,

And abject from the Spheres.

余倫敦にありて詩人ロウルエンス、ビンヨンと會食せること屢々なり  
き、氏語るにワトソンが發狂せることあるを以てせり、ワトソンは  
嘗てピストルを擁して大道に立ち、當時のプリンス、ラブ、ウエルス今  
のエドワード陛下の王車の通行せるに際しピストルを舉げて『止ま  
れ汝痴漢』と絶叫せることありき、ワトソンは直に瘋癲病院に送ら  
れたりと云へり、天才は狂者たるに近し。



ジレット、バージスは一種の奇才なり、米國の文界に得易からざるの滑  
稽作者として知らる、初めて其名聲を成したるは一小雜誌ラク紙  
上に於てなり、余彼に負ふ所頗る大なり、余は彼に依りて米國文界  
に紹介せられたり、余の紐育を去るの前數日、彼マサチュセツ州な  
るシチュエツ(ポストン附近)より手書して曰く、  
『ヨ、子汝の來りて夏期を共にせむことを欲するなり、余は實に一大  
建築を初めたり、余は手から一箇の家屋を建築し初めたり、汝安心  
せよ其家屋は極めて小なるものなり、之を稱して Goop Hotel といふ  
二階作りにて四間を有し其幅六尺にて其奥行八尺のトイ、ハウスなり、



然れども獨力の事業なるを思へよ其容易ならざるを知る可じ、四歳の小兒は其家屋の内に起つを得じ、二階は三尺平方の一間にて余の勉強室とせりヨ子よ、汝も來りて近隣の兒童と共に遊ばずや』と。バージスは常に斯かるフリーキを爲して世を驚すを以て快となす。彼の作にて普く天下に知られたるものは所謂パープル、カウにて左の四行は一躍彼の名を得せしめたるもの。

“I never saw a purple cow,

I never hope to see one;

But I can tell you anyhow,

I'd rather see than be one.”

余の桑港を去るの前數日人あり八月發刊雜誌クリチック紙上に顯はれたる最近詩集の批評中余の冊子に關する部分を抜き數莖のバイヲレットを添へて贈れるなり、其批評は青年詩人トレンスの筆に成る、余は無名なるを以て其親切なる發送者の誰なるを知らざるなり、數莖のバイヲレット、嗚呼數莖のバイヲレット、誰ぞ。

船の桑港を發するや船客皆ないふ布哇到着の時は旅順已に陥落の時なる可しと、船は布哇に着しぬ、旅順陥落せず、船の布哇を出づるや船客皆ないふ船の横濱に着するの時は旅順陥落の時なる可しと、

知らず如何、今日九月十三日、茲に之を記して後日に見む。

○歸朝日記 (紐育より桑港に至る)

八月三日。此夏にはナンタケットの周遊を共にすべしとてカンブリッヂにありて余を待てる老スタミードを失望せしめたり、清話深夜に入りて階下の夏虫を羨ましむべしと女詩人ビーボデー嬢に約したるも果す能はざるなりマリ、マクレイン嬢は日々緑蔭深き園庭に椅子を連ねて余の來るを待つと報せしは數日前の事なり、女詩人ウキルコックス夫人は一週日間を共に費さずや、英國より名ある戯曲作者の來れるありと請待狀を余に送れるも、余は之を果す能はざる所以は余は突如歸朝すべしと決せしに依る、歸朝、嗚呼余は十年前故

國を去り放々浪々英米を散遊し一事の世に誇る所のもの無きも、一點心に耻ずる所無く正道を活歩し來れるを以て聊か安意を得せしむるなり、十年永きが如きも一夢の如し、人間遂に故郷忘れ難し、余は歸朝すべしと決しぬ、決せるは十日以前にて、而して今日此の紐育を出立するなり、紐育夕刊新聞グローブ社の日本通信員たるの約は結ばれたり其他諸雜誌社に夫れ々の文章を寄稿するの契約は成ぬ、歸朝するに充分なる金は集りぬ、諸君安安全にて幸福なれとて數名の友人が余を、ハドソン河を渡りてペンシルベニア汽車ステーションに送れるに別れを告げぬ午後四時半なり、鐵車は動き初めぬ、紐育にはサラバなり余は先づ華盛頓を経てケンタッキー州に入り下

りてテンネシー州よりアラバマ州に入らむとするなり、アラバマ州なるバミングハム市には、余が戀人のあるなり、余は米土を去るの前、彼を見て別を告げむと欲してなり、細雨濛々、人は紐育にあらでは生活するの價なしとまで放言せる余も今日は紐育を去る事となりぬ、眼前には戀人を見るの快あり、眼前には故國ありいざ行かむ。四日。華盛頓には昨夜十二時前に着て直に出發せり、今や西バジニア州の山間を走りつゝあるなり、深遠なる樹影垂れ夏尙ほ寒し、各地のステーションにて幾十の旅客或は下り或は入り來るは、當地の温泉に浴せむとするものと見えたり、婦人のあるものは、手にテニス道具を携たるなり、其輕裝眞に美なり車中彼等の談話する所

輕妙、時には日光の直射するあり、時には急雨の汽車の窓を横ざまに撃つあり、夜に入りてケンタッキー州に入る、州の大都會ルイスビルに着するや、満面の笑を溢れしめて余を迎へる人あり誰ぞ、現今米國の詩人中最も尨なるの人マデソン、カハイアン氏其人なり、彼は余を待つこと已に二時間餘なりしと云ふ、汽車は遅延してステーションに入れるに依る、余はカハイアンを知る、然かも能く知るの一人なり、共にステーション附近の料理店に入り食卓を狭みて話談せむとするなり、『先づ余をして卿が近業を讀ましめよ、ケンタッキー州のキーツ(彼は斯く詩人間に知られ居るを以てなり)余を迎ふるに一詩の示すべき無きの理由なし』と余は云へり、彼は上衣の

囊中より一小詩篇を出して讀みぬ、蓋し其は彼が作中の最も優れたるものゝ一にて米國の詩文中最も優れるの一たるを失はず、即ち、

Dusk is thy dawn : when Eve puts on her state

Of gold and purple in the marbled west,

Thou comest forth like some embodied trait,

Or dim conceit, a lily-bud confessed ;

Or, of a rose, the visible wish ; that, white,

Goes softly messengering through the night,

Whom each expectant flower makes its guest.

彼は千八百六十五年三月ルイスビルに於て生れたり、其 Blooms of

六〇  
the Berry 或は Triumph of Music といへば其處女作なり幼少にて其詩才  
を世に知られハウエルスは其稱賛者の一人なり、數年前英國に於て  
其 Intimations of the Beautifuls を出版するやエドマンド、コズ氏はいへり  
the Kentucky Flavor, if we may call it so,—is perhaps to be most agreeably detected 然  
り、其他 Undertones, the Garden of Dreams, Shapes and Shadows, Idyllic Mono-  
logues, One Day and Another 等の著冊あり、余カハイアンに別れて午前  
一時再び汽車に上り、其寢室に入りて眠れり汽車の發せるは二時半  
なりき

五日。漠々たる廣野を走りて、テネッシー州に入り、其首府ナシユ  
ビル市に着せるは午前九時なり、此處に止まること一時間にてアラ  
バマ州に向ひ余の戀人のあるバーミングハムに着するは午後四時と  
知られたり、余は彼を見ざるを茲に殆ど二箇年如何に彼は變せしぞ、  
彼は如何に美しく如何に鋭敏なるかを余に問ふを止めよ彼は余の眼  
中天女の如く見ゆるなりと、白狀するに躊躇せざるなり、汽車は四  
時半バーミングハムに着せり余は直に其市の旅館ビルマンに入れり、  
電報を以て余の安着を彼に報せりいざ入浴して衣裳を新にし而して  
彼の來るを待つ可し、彼は姓をアームスト云ひ名をエセルと稱す年  
齒二十五、余は四年前華盛頓にありて老スタミードがバンガロウに  
宿せる時彼エセルを初めて見たり、一夜、スタミード外出せる時、  
突如として來り余に面會を求むるものなり、曰く華盛頓新聞ポスト

の記者なり、面談せよ、或は新聞記者なりといへば、卿は余を見ざる可し、余は卿の如くスタミードを「親父」と呼ぶの一人にて、余はスタミードの娘分なり、シスターのブラザーに面會するに何等の禮式なるを要せむと、余は二階を下りて、應接所に入り、其處一人の女、徐ろに指頭を以てピアノを弄するものを見る、其はエセルなりき、彼は Awfully glad to see you, yone といふ斯くの如きのみ、余は其の時に彼を愛するの念に撃たれたり、余も亦直に彼の戀人たりしなり、已にして降雪地上に積むなり深夜に入りて余は彼を其宿所に送り其いふにいわれざるの快を覺へたるは余の一生中忘る能はざる所なり、エセルは陸軍大佐チヨージ、アームスの次女なり世にも大

佐程驚く可き歴史を有するは無し、少にして南北戦争の時、北軍に投じて生命を賭し二十一歳にして少尉たり將軍ブランド彼を將軍口ウリングスに送れる時、文書して曰く Turn him over to Hancock, he will give him his belly full of fighting, if that's what he's after 然り彼は腹一杯戦争を得たり戦争の終れる時、彼は累進して大佐に至れり身に負傷せること三十六箇所なりと報せらる、戦争後陸軍を退いて商業に依り巨萬の富を得たるも投機に手を出して之を失ひ千八百九十九年十二月、運命を南阿弗利加に卜せむとして隊を編成して出發せむとして、政府彼の行を中止せしめたり、世彼を呼むで「近世のダータグナン」と稱す蓋し希有の一快漢なり、エセルは一時間を経ずして旅館に來

六四  
れりエセルは其美を増せり、華盛頓の新聞を辭して以來、優々として、生活を慈母と共にせるに依る、彼は余を其友人アナ、ウォーカー嬢の宅に伴ひ、晚餐を共にす可しといふ、余共に行けり、ウォーカー嬢はパーミングハムにある新聞エージ、ヘラルドの記者にして、余を嘗て其紙上に紹介せる文學者なり、其居宅に至る、エセルは「此はサミーン、フアミリーの一エキザンプルにて多く見ざる所のものゝ一なり」とウォーカー嬢は容姿雅麗其母の快活なる其父の温和にて自適せるものゝ如くエセルは「老ウォーカー氏、ヨ子に南北戦争の談話せずや」と迫れるを機として其語る所あり、極めて真率にして小説を読むの如き快なりき、而して彼は最後に日本の滿洲に於け

る軍事上の大成功を祝賀しぬ、其居宅は南方の例に依りて天井極めて高く机上に幾下の蠟燭を點じ、充滿せる空氣清く且つ香ばし、徐ろに食事せり、食後ポーチに出て談話す、頭を上げれば螢の點々暗黒を照すなり微風面を接吻して心地妙なり、已にして余はエセルと共にウォーカーを辭し、相共に腕を擁して歩を運べりエセルの宅に達するや一老女の出で余等を迎ふるあり其はエセルの母なるものなり、余は母を見る今日を以て初めとす、余は私かに心配せり、果してエセルの母は余を愛するを得るや否やと、母は余を見る尙ほ其兒に於けるが如きものなるを見て一安堵せり、エセルは余に耳語せり曰く母は汝を愛するや必せりと、十一時余は此處を去りて旅館

に向へり

六日。朝來降雨せり、余馬車を驅りてエセルの家に向ふ暫時にして雨止む、余エセルと山林の間を散歩す談話連々たり最愛なるエセル、エセルが二人の幼弟エドマンド、ハーバートなるものを伴ひて旅館に歸へり共に晝食すエドマンド、ハーバートの二人は田舎に生長して未だ嘗て旅館を知らず、ヒルマン旅館を見て一宮殿なりとなす其宮殿に入りて食事するの快や蓋し大なり、彼等高く笑ひ高く談じ、余エセルと相見て微笑せり又馬車を驅りてエセルが家に歸る時に六時、晚餐の準備已に成り居れり、エドマンド、ハーバートがヒルマンに於て見たる所のもの食ひたる所のものゝ談話に依りて食卓を賑

はせり、愛す可き小兒等よ、エドマンドは小學校に於て學事優等の故を以て近くセントルイスの博覽會見物を校費に依りてするを得意として余に誇れりエセルの兄弟にてヲスカイなるものあり余之を知る今紐育にありてデヨールナルに執筆し居れり  
七日。余エージ、ヘラルト新聞社を訪ひ日本の通信を約せり十一時、エセル來れり共に晝食せり、其後、余は彼と共に過去三年間往復せる書簡を讀み時に笑ひ時には『如何に愚なるよ』と言ひ合へり共に晚餐してエセルを其居宅に送り  
八日。余ランチを携へてエセルと高丘に遊べり『卿は今夜此地を去らざる可からざるか』とエセルは別を惜むものゝ如し、余とても同



六八  
じきなり、降雨し來れり、余等急ぎて歸家し、馬車を命じてハーバ  
ートを伴ひ旅館セルマンスに至て晚餐を共にせり食後再び馬車を驅  
りて其家に彼等を送り別るゝの情禁する能はざるものなり、エセ  
ルは金のバクルを余に與へたり、「卿が成功は此の鷺バクルに鷺の模  
様ありを以て其タリスマンとせよ」と云へり又余に送るに銀製の匙  
を以てせり「余は尙ほ此のクローバーの葉の如く卿に従ふものなり  
世にクリンギー、クローバーといふにあらずや」とてクローバーの  
葉の状せる一箇のピンを與へたり余は「汝が日本に來るの時は、余  
は汝に約すに春は櫻樹の一本を以てし秋には菊の數株を園庭に植ゆ  
るを以てすべし、共に共に月を中天に見、一杯の茶を分けて飲む可

六九  
し」とて別れを告げたり、午後九時半、Sweetest Ethel 余は汝の爲め  
生命を犠牲にするを惜むものにあらざるを期せよ  
九日の昨夜十時半の汽車に乗じ今日午前十時ニユウ、ヲリンスに着  
す停車場に着するや同地週刊雜誌ハラクシン主筆ラベック氏の余を  
待てるあり、余僅に二時間を有するのみなれば、唯其市街の一斑を  
知るを以て足れりとす可しとて、同氏と共に出づ、氏は先づ余を新  
聞タイムス、デモクラットに伴ひ其主筆記者并にヘレン、ピトキン嬢  
に紹介せりピトキン嬢は余が友人フロウ、フキールド嬢の親交ある人  
にて數卷の小説を公にせる所のもの、快談數刻社を去りて、ラベッ  
ク氏と共に食事せり、食後直にステンションに向ふ、余の取らむと

する、汽車は南方大平洋線路なり、已にして再び車中の人となる、  
汽車ミスシツピー河畔の一小停車場に着する時、余顔を出して外を  
見、一園庭の中に一小池あり、中に日本の金魚數箇悠悠々々自適浮動す  
るあり、余思へらく米國に於ける日本の侵入驚く可きものなごり。  
十日。午前八時テキサス州サンアントニヲに着す此處は嘗て現大統  
領ルーズベルドがラフ、ライダーを編成してキューバに向へる所に  
して、則ち彼は此の地よりして白亞館に直進せるものといふ可きな  
り、朝刊新聞一葉を買ひ讀む中に、世の所謂ラフ、ライダーなるも  
の、名譽成功を攻撃せるの一文なり、サンジャンピルのグロリーは  
米國新聞の製造物にて元來ルーズベルドが自家の捏造的廣告に他な

らずと極言せるなり、思ふに、南部諸州はルーズベルドが黑人種に  
對する處置を見て大に憤激するあり機の乗すべきものを見るや其反  
對の勢力を大ならしめむとするものと見て誤なかる可し、サンアン  
トニヲを發するや一望際無き漠々たる曠野を奔馳せり、目に見る所  
のものは空中の白雲のみ、集まりては散飛し散つては亦集る、或は  
灰色となり或は淡黒と變せむとするなり、其形の異變する名狀す可  
からず、空中のマジック、驚くの外無し、世に有名なるハイブリッ  
ヂを過ぐ、其高さ三百二十一尺にて其長さ二千百八十尺、已にして  
鐵車はリヲグランデ河を左に見て走る、其は則ち墨國の國境を經過  
せるなり

十一日。米陸の曠野際限する無くテキサスに入りてより更に一物の  
 見る可きなし、此處其處と百哩に一軒二軒と停車場附近に家あるを  
 見るのみ、彼等此邊に住居せる人等、必ずや神を信じ全く自然に依  
 頼して安堵せる大精神は此地に於て初めて養ひ得べこと感ぜざるを  
 得ざるなり何等の無人境ぞ汽車のエルバソに着せるは午前九時なり  
 而してアリゾナ州に入る  
 十二日。汽車アリゾナの『沙漠』を過ぐ此處不毛の地、暑氣非常に  
 して不快を感ずるのみ  
 十三日。今日午前十時より漸くにして加州に入る嗚呼加州は樂天な  
 り初めて汽車コルトン停車場に入るや果實のヲルチャードを見る、

何等の富饒、加州はエドワード、ロウランド、シルが

..... the land that guards the dying day,

Whose burning tear, the evening-star,

Drops silently to the wave afar;

The land where summers never cease

Their sunny psalm of light and peace.

Whose moonlight, poured for years untold,

Has drifted down in dust of gold;

Those morning splendors, fallen in showers,

Leave ceaseless sunrise in the flowers.

なるもの、汽車十二時にして、ローザンセルスに入る、下軍して直に夕刊新聞エキスプレス社を訪ひ其主筆クロウバー氏を見たり、氏は嘗て余の市俄古にあるの時余に親切を盡せる所の人、氏に約するに日本の通信を以てせり、其れより余の親愛者且尊敬せるチャールス、ルミス氏を訪問せり、氏はアウト、ウエスの編輯者にて氏の墨國の事情に關して一のフソリチーなるは世の許す所なり氏又インデアンの言語を能くし、滿腔の同情を以てインデアンの爲め盡力せる所あり、嘗て二名のインデアン、ボーイを助手となし、自から自家の住家を建築せり其費せる所の年限二箇年にして其費用一萬弗を要せりと聞けり、其兒女リヲタは「叔父歸り來りたり」さて余を見て喜色あ

り余彼を接吻して再會の幸運を祝せり、食をルミス一家と共にして午後四時に至る、六時再び汽車に乗じて桑港に向へり十四日。嗚呼桑港、余が第二の故郷、余は五年前此處を去れり而して今や歸り來り桑港よ、余は先づ余が日本人の友人を見ざる可からず、路にクロニクル新聞社に入り文學批評記者フキチ氏を見、氏の紹介に依りてステール氏と面談しクロニクルの日曜附録に投書す可きを約せり、氏は日曜附録記者にして氏は數箇の問題を興へて、其執筆を余に求めたり十五日。午前新聞コールの演戲批評記者パーチントン嬢を其寓に訪ふ、嬢とは十年來の親交あり嬢と共に、コール社を訪へり、而して

余が最も親愛なるスミス夫人(女辯護士)をミルスビルデングに見る、  
 夫れより余は直に桑港灣を渡りてヨークランドに至り、其高丘に於  
 ける老ミラーを見むとせり、ミラーが所謂ハイトは、余が數年の日  
 月を經過せるの所、老詩人戸を排して高聲を以て曰く、Is that you,  
 Yone? と、然り、握手數回、共に壯健なるを祝せり。夜に入り、余  
 はミラーとの對話を綴れり  
 十六日。高岳を下りて、桑港に歸らむとす、五年以前往來せる道依  
 然たり屢々路傍に休憩しては遙かに桑港の灣を臨めり、側に一箇の  
 加利保爾仁亞のポピーあり、宛然舊知を見て祝せむとするものゝ如  
 し、如何に余は其麗色の燃えむとするが如きを愛せしぞ、加利保爾

仁亞のポピーは愛と情とを説明せるなり、心の正直と涙とを説明せ  
 るなり、神の所謂黄金かミラー詩あり即ち

The golden poppy is God's gold,

The gold that lifts, nor weighs us down,

The gold that knows no miser's hold,

The gold that banks not in the town,

But singing, laughing, freely spells

Its hoard far up the happy hills;

Far up, far down, at every turn,—

What beggar has not gold to burn!

○歸郷の記

故郷忘じ難しで、紐育を八月出發十三年目で東京へ歸つた、十月十六日新橋發の東海道列車に乗つて郷里尾州に向つたのである、藤澤驛に止まつたのは余の兄にて僧侶なる祐眞師が同地に於ける常光寺の住職をして居るのを訪ふが爲めであつた、余は祐眞師と共に江の島鎌倉を見物した、美は美なりと雖も其風物の規模の小にして、大なる太平洋に面しつゝも其ルームと其スペースを充分に見ることが出来ぬのは残念である、米國加州の桑港よりロスアンゼルスに行くのに所謂コーストライン(海岸の線)を取る時は大なる江の島鎌倉の

風景を見つゝ二百八九十里も走るのである、大陸の景と小島の景とが違ふのに驚かざるを得ないのである、ジツト下から見上げると其大なるのに驚くが大佛も海岸に立つて居たら一層の壯觀であらふと思ふ、沈黙と沈思とを以て波濤激烈なる太平洋に面して少しも其容貌を變せず其態度を變せぬといふを思つたら其性格の優大なるを崇拜せずとするも得可からずである、余等は暮色遠くより來る間を彷徨し、歸鳥に催促せられて常光寺へ歸つて一泊した、翌朝祐眞師の讀經の聲に覺めた、寺院の寂寞の裡に一夜を過したのは生れて以來のことなるのに、特に米國の雜沓なる所より歸つた余には一種不可思議の思がせられた、朝七時の東海道列車に乗つて名古屋へ向つた、

残念なのは富士山を見ることが出来なかつた、否、少々其頭の先を  
鈴川邊でチラと見受けたのみであつた、寧ろ一層趣味の深きものな  
りといふ可しであるまいか、實に其氣品の高大にして其麗絶なる言  
語のなきのを嘆ずる次第である、余は夢の中で大なる庭園の間を走  
つて居るのであると思つた、實に庭園の間を走つて居るのは事實で  
ある、余は英米兩國を多く旅行したものであるが、また東海道列車  
の如く美なる場所を走る列車のあるのを知らぬのである、山は高く  
て空氣は清し、樹木は青くて、諸々方々に戦争中のことゝて日の丸  
の旗が見える、それに稻荷の赤き鳥居も少からぬ風景を加へるので  
ある、アノ纓の如くになつて黄色なる米は何等の美觀ぞ、遠方に見

えて眞赤なものは柿の實ではないか、水は流れて長く鳥は飛んで高  
し外人が日本は世界の樂園であるといふのは過言でないのを知つた、  
ダガ瀛車中乗客の無作法には驚くの外は無いのである、洋服を着て  
居る紳士も靴をぬいで座つて居るし、脛などを平氣で露出して居る  
は云はずものことである、用事を使するのに戸さへ閉ぬ連中さへあ  
るマルデ無禮講とでもいふ可きか、先づ花見か何にかに一寸ピクニ  
ツクに行つたといふ有様である、午後六時すぎに郷里津島の停車場  
に着した  
老父は、余が「ヲトツサン」といつた言葉に驚かれた、老父は余以  
外に余を求めつゝあつたのである、余は老父を見ざることに茲に満十

一年である、老父の余を見て余なるを知ることが出来ぬは無理もな  
 い次第である、『天王様津島町の氏神へ御禮参りをすぐするかの』と  
 余を促がされるは老父は元來熱心なる天王様信仰者の一人であるか  
 らである、家へ着いたら老母は涙ながらに『ヨウまあ歸つてくださ  
 た、もふ遇はれまいかと思つて居たわな、ホントに變つたことは、  
 マルデ西洋人の様だわへ、眼の邊りから鼻の格恰が、ヤレ／＼懐し  
 やヨウ歸へて来てくださったな』と尾州辯の温き調子に母の慈愛を  
 加へた言葉に余も涙を落したのである、余の到着は一寸時間に弘ま  
 つたで、隣家の老男老女、あるは子供、嗚呼十七八年以前である、  
 子供友達が今では大人となりて少くも二人以上の父たる人々が變る

變る余を訪ね初めたのである、『マア立派にお成りになりました、ダ  
 イツウ美麗な洋服を着て、お母様が不斷生きてる中に一度お目にか  
 かつて死にたいといつておいでになりましたに、ヨーコソ歸て来て  
 くだされましたな』といはれるので、余は思はず知らず夫れ程老父  
 母が余のことを思つて居て呉れる其百分の一も思はなかつた罪を謝  
 せねばならぬと思つた次第である、余は親不幸であると思つたので  
 ある、故郷は愛す可し家は戀しきものである、此夜は鳥のヒキズリ  
 (鳥鍋)で食事を了したが、生れて以來の美味を感じたといふを憚らぬの  
 である、高等小學校長は余を訪問して明日一つ演説して呉れよと依  
 頼し來り、町内の誰々等は余を招待して一酒宴を張らむと意氣込む



で居るのである、米國で好遇せらるゝよりは日本で好遇せらるゝ方が愉快である、東京で好遇せらるゝよりは郷里の人々に好遇せらるゝ方が遙かに愉快である、余はホーム、ウキート、ホームの一篇を私に誦して眞に名章であると思つたのである、夜十時頃客は皆な散じた、按摩を取らして眠りに就いた、風は靜に隣りの寺なる弘淨寺の松樹にあつて音楽をなこつゝあつたのである

(明治三十七年十月八日稿)

○十六年後の郷里

余は確にリップパンウキンクルであつた、實兄でさへ見分けることが出来なむだ又實兄も余を見て余たるを知らなかつた、横濱へ着いて六時の瀛車で東京へ向ふと電話を掛けた故に實兄高木は余を横濱の停車場まで迎ひに來たのであつた、余は横濱の其人を停車場で見たのであつて又其人則ち實兄も余を見たのであつた、が、雙方言葉も掛けずに分れて雙方共同列車に乗つて東京へ來た、實兄は余を發見することが出来ぬと斷念したのであつた、新橋へ着て見ると横濱で見た人が數多の人と話をして居るのを見た、其人々の中に昔日御

厄介になつた磯長の奥様が居るのを見たので『アナタ』はとて近い  
 た、『彼方は横濱の停車場で』と、いへば、横濱で見た人は『それで  
 は貴様はヨ子であつたか』といふ次第で哄笑一番したのであつた、  
 が、今郷里へ歸つて見ると、十五六年も郷里へ歸へらぬのだものと  
 云ふであらう、同町内のもの一人たりとも知る人は無い否見分が  
 付く人は無いのであつた、『私は隣りのアレですが』といはれて見れ  
 ば、嗚呼、其人とは子供友達で七ツ八ツの頃は其人は女房役で余は  
 亭主で木の下で飯事して遊ぶのであつた、して今日は其人は三人  
 の子供の母となつて余を訪問したのであつた、髪は丸鬚に結むで一  
 種の世話女房と成り濟したのである、『ヨ子様久々で』といはれて見

るも一向分らぬので聞いて見ると、『向ひのものです』といふ其人  
 は余が十一二歳の頃は六つか七つで、常に手を引かれて習字の先生  
 の魯堂様へ通つた子供であるといふのが分つた、子供、子供では無  
 い今では二人の子供の父であるのである、『此れを覚えて居ますが此  
 れは貴方が舊し書いてくださった大黒様の書ですが』といはれて見  
 ると少しも其人には面識も無い様である、『私は彦です』といはれて  
 見ると、ハ、そうか、其人否其子供は余が一番可愛がつたのであつ  
 た、常に蘭の書や櫻の書などを書いて與へたことを覚えて居る、あ  
 る時其彦サン、確か六つ位であつたらう、隣りの店で朱墨を一挺買  
 つて来て余に禮をしたのを、余の母親はそんな物を小さい子供から貰

つてはとて返へしに行つたことがあつたが、『大きくなりましたな』といへば、『ハイ妻を持ちました』といつた、齡を聞いて見ると二十三とかであるといふ、嗚呼十五六年の歲月は決して短いものでないことを今更のやうに思つたのである

聞いて見ると同町内からも出征して居るものが二人ある、其一人は負傷して名古屋に居る、又其他の一人は隣りの酒屋の婿で、其母は『お國の爲めですから、爲様がありませぬ』といつて居るが其腹の中では大に困つて居るのは察せられる、娘則ち出征軍人の妻たる人は余が郷里にあるの時は五つ計りの子供であつたが病床にあるといふ事で、二人まで子供がある、『お糸サン』(母の名)は中々の勉強家で

あると余の母親がいつて居るが、その通りで今日も朝からチャランしき着物を作るのであらう、『今回状がきたが讀むでください』とて父親は余に一枚の紙をさされた、見ると出征の軍人を送るため停車場まで出よといふことであつた、實に光榮を以て軍人を送るべしだ或は負傷し或は戦死するのであるから、又昨夜は遼陽の大勝利を祝する爲めとて提燈を點じた、餘り騒がぬのでシンミリとして戦争に對して居るのである

神様には盛衰がない、否、斯かる戦争の場合では一層その御威光が明かになつて信者が多くなる、津島で神様といふと則ち牛頭天王様

九〇  
のことである、行つて見ると提燈數多ともつて火が夜中焚かれて居る、目に幾百千人となく參詣者があるといふことである、祠官は社殿にゐてお守を賣つたり、祈禱を頼むものには特別に祈禱せられるのである、神社の園庭は松や杉の木が鬱々として神々敷き思がせられる、幼少の時には「ゴヘンサマ」(天狗)が居るとて、余の如きは英雄崇拜で常に義經の傳を愛讀して牛若丸が天狗様より劍術を學むたと合點して私に深夜天狗様にお目に掛りたいとて出懸けたことさへあつたのである  
津島、津島といへば穴の中にある様な田舎の町で大に發達進歩の遅れたる所であるが實に變化したのである、津島にも鐵道が出來て其

資本は六十萬圓といふことである、中學校も出來て町の品位が十倍も高くなつた高等小學校は縣下で一番立派といふことである、自分の家へ歸へり二階へ上つて東の障子を明けると弘淨寺の松樹は青々として見え寺の墓場にある櫻の木は小春日和に欺かれて花も咲いて居る、チョット頭を擧げると少し向ふに建物が見えるのがそれが高等小學校の女子部で幾多の小女の頭髮が見える、聲が聞えてくるのを聞くと征露の唱歌である、嗚呼軍國であつて見れば女子でも征露の歌をうたつて勇氣を鼓舞せねばならぬ、その聲の明らかに麗しさよ  
南の窓を明けると余の小さい時に時々人魂が飛むで隠くれたといふ松

の木が、一本高く『一別以來』といふやうな様子をして余を見るのである

(十月十日稿)

### ○京都の秋

燈火親む可しといふ秋に、日本の秋に、天下中最も愛す可しといふ日本の秋に、町家で電燈を用ゐずに行燈や燭臺を用ゐている京都へ来たのは尤も時を得たものといふ可きではないか

東京より見てさへそうであるのに米國より見たなら二十世紀の世を去つて突然十五六世紀に舞ひもどつたといふ感じがするのである、歐米人が京都を愛するのは無理もない彼等は方今の文明に疲勞して居るのである古昔の風物を樂しみたいと思ふのであるから、少くも古昔の影を存して居る所へ集まるのは自然の道理である、日本に京

都ど日光の光ある間は日本は世界の公園視せられるのである。(余は奈良を忘れてはならぬ)、余は京都人に將來共に行燈や蠟燭を點して居てもらひたい、余は常に手紙を書くといふことを樂ものであるが、京都に在る間は夜書くことを止めねばならぬ。悪くいへば京都は一種のマスクを用ゐて居るのではないか、徒に昔風を飾つて居るのではないかそれは一のアフエクターションではないか、悪くいふのを止めよ、日本の天下は進歩／＼に狂亂して居る間に京都は少くもプロテストとして顯はれて居るのである余は京都へ來たのを喜ぶ、其理由の一には余は余が少年時代の親友が余を案内するといふ親切も混じて居るのである。

「君はドウモ肥えたね」と余は余を迎へる人に停車場で發した最初の言葉であつた、其人は名古屋の豪商瀧定の子で今では其京都支店に在る瀧廣三郎君で余とは十七年も前に名古屋の尋常中學で席順を争つた間柄であつたのである、「君の眼付で余は君たるを知つた少しも變らぬ随分と例に依つてキビシイね」と瀧君はいつた、余等車を連ねて君が宅へ着した「一別以來」甚だ御無沙汰「實は余等は十七年間手紙の往復したのは僅に數回であつたのである、然し親友たるは親友であつたのである。蒲團着て寝たる姿の東山、余は常に東山の句を思つては京都を慕つてゐた其東山は何處である、余は少くも今夜東山の見える所まで散

歩ほじたいといふので、余よは突然とつぜん音調朗おんてうはらかなる水聲すゐせいに驚おどろいた、余よは斯かる明めい清せいなる水聲すゐせいを耳みみにしたのは幾いくねん年振ぶりであるのであらうか、鴨川かもがは」  
そふか、成なる可べくなら下したへ降りて余よの汚けがれた足あしでも洗あらひたいものだ  
と思おもつたのである、「向むかふに見みゆるのが東山ひがしやま」余よは鴨川かもがはの橋はしの上うへで東  
山やまを見みた初はじめて東山ひがしやまを見みたのを多謝たしやするのである、月つきが出でた、余よは  
月つきを東山ひがしやまの上うへへ出でた月つきを鴨川かもがはの橋はしの上うへから見みたのを多謝たしやするのであ  
る、京都きやうとの月つきは古昔こせき幾いく萬まんの歌人なじん何なに々く朝臣あそんとか何なに々く卿きやうとかいふ連中れんちゆうに  
歌うたはれた月つきである、余よは西洋せいやうの思想しきさうを以もつて京都きやうとの月つき否いな歴史れきしある月つきに  
對たいしたのである「世よは追おひ々く變遷へんせんするからね」と余よは獨語どくごしたのであ  
つた

余よは其晚そのばん面白おもしろく寝たのであつた  
翌日よくじつ、余よは瀧君たきくんの案内あんないで音おとに名高なだかき嵐山あらしやまの秋あきを見みに行ゆつた、嵯峨さか、  
そふだ嵯峨さかや御室おむろと歌うたにもある、琴こと聞き橋はしとて何なにやらといふ人ひとが小  
督こくの局つぼねが弾ひじて居ゐた琴ことを聞ききつけたといふ橋はしはどれか、余よは遂つひに嵐  
山やまへ來たのであつた、何等なんらの麗絶れいせつ、余よは常つねに萬物ばんぶつを許ゆるさぬ一人ひとりであ  
る、余よは常つねにサタイアを以もつつて満みちてゐると人ひとにいはれる一人ひとりである  
が、此この嵐山あらしやまに對たいしては明媚めいびの景色けいしよくといふの外ほかはない、余よの愛あいする  
秋しゆしよく色しよくは木きの間あひだよりチヨロ／＼と顯あらはれてゐる、楓樹もみぢなるべし或あるひは口  
ウの木きなる可べし、山やまの景けいは余等よらに言葉ことばをかける様やうである、嵐山あらしやまの沈ちん  
静せいは自身じしん非常ひじやうなる詩歌しかである、今いまは山やまが手てに取とる如ごとく近く見みえるか

九八  
と思ふと今はまた遠く去つて優々たること恰かも雲の如しであつた、木の葉は漠々として神聖なる烟の如き衣裳を着ていたのである、余は櫻の時に來て嵐山を見ないのを喜んだ、さぞ雑踏することであらふ、余は秋に來たのを喜んだ否、初秋で人の餘り多く出ない時に來て嵐山の風物を我物顔に見ることの出來るのを多謝したのである、余は元來ゼラスな性質を供へている、余が愛する所を人に分けるを喜ばぬ、嵐山の景は此日は余と瀧君との専有物であつた、風は冷かであつた、水を見よ其清さ加減は如何、舟を出して流れに上つていつた、水の泡の白さ、温泉場あたりから舟夫三人が舟にヒモを着けて引つぱるのであつた、愉快である、舟或は岩石を噛む水の激さに

九九  
動かぬこともあつた、世に山水といつて別々では面白くないが嵐山程工合よき山水の景は少いのであらう、谷の中程で一艘の舟に西洋人数名をのせて下つてくるのに出合つた、其下るの急さ、彼等は日本風景の美は此處にありとも思つたのであらう、余等は保津川まで行つて歸つた、舟は大なり余等二人のみであるから、山を歩いて何處へか行く田舎のもの數人を載せてやつた、中に二人の子供があつた、常に川の上を下むいて顔をうつして居たが、思ふに家には姿見などいふものはあるまい、自分の顔を見るのは初めであらうと思つた、其母たるの人は齒を黒く染めて居た、其様子が繪にかいてある女、あれは何んといふのであつたか、頭の上に乗せて物否な花な



ごを賣つて歩く女の繪に似てゐる、キット子供の母は其の一人であつたらふ

一〇〇

余は常に日本人は櫻とか楓樹とかばかりいつて、云はゞ赤いものばかり子供の様子に稱賛するといふは不親切、實に自然に對して不親切であると思ふのである、何故に青い松の木を稱賛せぬか、稱賛しては居るが何故櫻や楓樹と同格に置いて稱賛せぬか、松の青さあつてこそ櫻や楓樹の赤いのが目立つてくるのではないか、余が向年永く日本にいたら「松見見」の會でも催したいと思ふのである  
京都へ歸つて南禪寺へ急いで山縣侯の無隣庵とかの隣りで、瓢亭とかいふ料理屋へ着いた、余は其室の小にして茶席の様に見えたから

驚いた余は元來茶の飲み方も知らねば又好まぬのである、これが料理屋であると知つて安堵したのであつた、料理屋であつた然かも上等の料理屋であつた、出るものは皆な口に適した、余は最も寂寞たる晚餐を瀧君と二人でしたのであつた、余第が食事して居る室は樹間にある小なるもので、夜氣最も嚴冷なる夜氣は東山の方から來るのであつた、顔を擧げると星を見ることが出來た、京都の星、星の紫色は京の友禪染の色である、余は最も美絶清絶なる星を今夜京都で見たいといふのを辭せぬのである、余は常に東京の新橋や柳橋で見ると星は三味線の爪弾きといふ音を出して居ると思ふ、今夜此處で見た京都の星、其星は音樂を弾じて居るとせば琴を樂んで居るのであ

一〇一

らう  
 食事を済まして歸路に付ふとすると、料理屋の下女が余等に瓢の書  
 いてある小提灯を與へた、余等は此の提灯の光に依りて京都の夜  
 の暗黒(實に京都の夜は暗いのである)を照せといふのであつた、そこ  
 で余は之を携へて山陽の所謂『一帶青松路不迷』とか吟じたといふ  
 松樹の側を散歩しつゝ歸つたのである  
 京都は英國のキヤセドラル、タウンを一所に集めた様なもので神社  
 佛閣で持つてゐる、十歩に一社五歩に佛殿といふ有様であるが、余  
 は京都に来て日本の所謂宗教の滅亡に近いのを見た、其千百といふ  
 神社佛閣は皆な一種の京都の景色の一と化し去つて、其精神は灰に

化し去つたのである、余は京都千百の神社佛閣中にスピリットの存  
 在を疑ふのである  
 余等は嵐山見物より「ア、シンド」とて歸家した。  
 余はまた明朝、瀧君を引出して東山、銀閣寺とか金閣寺とかを見ん  
 とするのである  
 『蠟燭の心を切るものを持つて来い』と瀧君は手をたゝいて下女を  
 呼んだ、『また茶を』といつた、實に京都は蠟燭と茶との京都である  
 と思つた  
 (十月二十八日稿)

○奈良より

大阪を去るといふ日の晩餐の席上で、奈良信仰者なる三井の平賀君は余に奈良行を促された、君は奈良を米國で所謂ナショナルパークの様にしたいとまでの熱心家である、余に極力奈良を米國に紹介せられたしと云はれたのである、故に眞直京都へ歸らずに、更に一夜を大阪ホテルに寝て、翌朝奈良へと列車を取つた

奈良へ来るならセメテ古今集一部位は持つて来るのが當り前ではあるまいか、和歌と奈良、奈良のアトモスフィアは和歌である、世に悠々として追らず平和と沈靜なる所ありとせば則ち奈良である、余

の囊中にはシエレーの詩集があつたのである、余の持つて来た詩集は和歌でなくて英語の詩集であるのみか、余は洋服で来たのである、洋服と奈良、これ程不一致なるはあるないと思つた、余は烏帽子直垂で来るのが至當であると思つた、三條の本屋で今古集一部を買ふと思ふと、無いといふのに驚いた、奈良の本屋に和歌の本が無い余は驚かざらむとするも得なかつた、シテ余は英語のリーダーのあるのを発見した、奈良でさへ二十世紀の突進を妨ぐる事が出来ぬと見える

親愛なる鹿、鹿は往昔神春日を乗せて奈良へ来た時の眼と同じ眼を以て、同じく温和で愛を以て満てる眼を以て余を見るのであつた、

一〇六  
余は煎餅を買つて與へた、其馴々敷さ加減、余は獨り鹿の群に後を追はれて松杉鬱々たる處を歩いた、余は自身に神春日であるかの様に思つたのである、實に此處は神の靈魂が浮動して居る所である、デビニチーが生きて居る所である、青き松や杉と眞朱な神社、余は常に青を以て沈黙の色となし朱を以て信仰の色と思ふのであつた、余は社殿が無邪氣で且つ太古の風ある少女三人に舞をして貰つた、宮司は神の名が書いてある紙の片と米を紙で包むだものを與へた、余は其紙の片を投げやうと思つたが、イヤ、そふは大膽になれなかつた、宮司は神春日として一生保存す可しとして呉れたのである、余は道理上信せぬのであるが精神上信せむと欲したのである

余は鹿の付いた櫛や簪を五六本買つた、之を賣つて居る女は余に其は鹿の角、然かも神社の園内に居る鹿の角で作つたものであるといつた、余は何をいふと思つたが、イヤ、少くも春日の神社の園内では人は虚言を吐かぬと信せむと欲したのである  
眞に大佛は大佛であつた、人は常に日本の萬物は小なりといふ余もさう云ふのであるが、此の大佛を見て左のみでは無いと思はざるを得ない、如何にして之を鑄造したかは疑問である、其大なるは天下無比であらう、余は其膝の邊りまで上つた、余は斯る大なる佛、否佛ならずとするも、人間でも斯る大なるものと半日を悠々と費したいと思つた、大なるものゝ側にあると自然大なる思想を養ふのであ

る、日本の佛者は大なるものだ、寺には大寺院があり、佛には大佛を作つたのである、大なる宗理を教へた佛敎はまた物質的に於ても大なるものを作るといふことを吹鼓したものであると思つた、それのに其他日本に萬物の小なるはまた何たることぞ大佛殿の新築とて金を集めて居るが、何故家を造らねばならぬか、造るなら大佛相當の家を造らねばならぬ、今日大佛が入つて居る位の家を造るなら、まるで、コルベツトとかジェフエリーといふ米國の大兵肥滿の相撲取りが日本の茶席へ入つたやうで其苦しさ加減が察せられるではないか、大佛自身も屋根を戴いて居るよりか青空を傘にして居る方が愉快であらう、又大佛の壯嚴を明に表白すること

が出来来るではないか、大佛堂新築は愚の極と余は思ふのである余は數錢を拂ふて大佛の鐘を鳴らすの許可を得た、余は鐘いた、鐘は鳴つた其深淵なる聲、其沈鬱なる聲、深淵にして沈鬱なる寺院の鐘の聲は佛敎とは離る可からざる縁がある、則ち鐘の聲は佛敎の聲である、日本に『沈むだ鐘』を書いたハーフトマンの如き文學者があつたなら、寺院の鐘を題にして宗教的大詩篇を作ることであらう、日本の文學は淺弱である、日本人は鐘の深淵と沈鬱たる聲を聞いて精神的養育を受けなかつたのは何たることであるか余は興福寺あたりを見終つて、普通一般の奈良見物を終ると太陽は西へ沒した、余は此邊を徘徊して三笠山(余は三笠山には失望したの

である(と白状する)に出づる月を待たうか  
暫時にして大佛の鐘は暮時を告げ始めた、鳥は歸へり來つた、奈良  
の空氣は平和沈靜より清冷の域となつた、余は一寸見振ひして向ふ  
を見ると、五重塔の頭に星が一つ顯はれた

ゴーン！　ゴーン！

(十一月二日稿)

○左様なら郷里

余が父の父の代に植ゑたといふ庭の楓樹、其楓樹が深赤の血を出し  
た様に今を盛りである、否、盛りは過ぎたのであらう一葉二葉は庭  
上に落ちて居る、楓樹はデプスのある日本の秋を無言で歌ふ大詩人  
である、人でも死ぬ前には必ずや一時は呼吸を吹き返すものだ(と承  
知して居るが自然もその通りで冬の死の域に入る前に其の美を充分  
に示すのであらう、櫻花の歌ふ詩は云はゞ美麗で餘り真率でない、  
楓樹の詩は心の詩である否(な)心の血である、余は常に斯る真率なる  
楓樹を愛する日本人で餘り真率といふ性質が無いのを不思議に思ふ

のである、全體日本人は物を愛するばかりで物を敬せぬのであらう、楓葉を敬して其れに依りて感化せられるといふ美質を供へて居らぬのであらう、「菊が咲いたから見てください」と父はいふので、成程、名も無き菊が片隅に咲いて居る、歸朝する前までは余は少くも一二年を郷里で菊でも培養して暮したいと思つて居たのであるが、サア歸つて見るとそうも成らぬ、「菊を花瓶に生てはドウダ」と母がいふが、小供の頃には多少生花の趣味や其方法を解せぬのでもなかつたが、嗚呼身を米國といふ活世活の混沌裡に入れてから、自分の趣味は雜薄になり終つたのである、菊の花に手を付けたら日本の菊の花は其指先の堅きに一驚を喫するであらう

余が一番の兄で秀之助とて上野の鐵道會社に奉職して居るものゝ子で「芳子」といふのが今日田舎にゐて慈愛深き祖母の懷に抱かれ居るのが小學校より歸つて来て、「ヲ、寒いお祖母様、綿入れ出して頂戴、多度山(三里近く)の山に雪が降つて来た」といふ、最早や秋も半は過ぎて冬も最際に來てゐる、朝來風が弘常寺の松の樹に強く當つて鳥の鳴き聲も寒げである、過去滿十一年間米國にある間は何時春が來て秋が過ぎるのも碌々知らなかつた、米國の都會は自然を放逐し終つたのである、今郷里へ歸ると時候の變遷する工合が明白に知れる、日本に居ては誰でも詩人に成らずには居られぬのである、自然を歌ふは日本人を以て第一となすといふ世界の評は至當である

のである、日本へ来て初めて人は自然に接近することが出来る、自然もまた熱心に其の變化の様子を見せ時期を誤らずに動いて居るのである

余が歸郷の報が廣まると津島町で歡迎の會を開くとて騒いでゐたが、愈々今夜であるといふので尋常小學校(會場)に出掛けた、門口には大なる提灯を點じて余が來ると町長の堀田といふ人が恭しく禮をして余を迎へられた、式場に入ると既に百有餘人が余を待つて居たので、前代議士加藤君の歡迎の辭やら何やらで余も一場の談話をしたのであつた、それが濟むと「久々で」と舊し小供の時に共に投網を天王川に打ちにいつた誰とか「私の妻は貴方と同級であつたそうで」と

て余に物言ふ人が幾多あるのである、「彼方は小供の時は「豆子」(余の小供時代の異名)とて小かつたが實に大きくなりました」と驚いて視詰める老人もあつた、家へ歸ると母親は余の寐巻を火鉢に掛けて温めて待つてゐたのであつた、母の慈愛は今更の様に感せられた、親には孝なる可し是迄の不孝はこれから取返さねばならぬと思つたのである、この夜の寐物語に老父は「早いものだのヨネが歸つてからモウ一箇月だが、何日歸るか知らぬとて目を待つて居たのが三三年だを経て見ると早いものだの」といふと、「そうです、早いものだ、來年又米國へ歸つて三年も経つたら家へ歸つて來るといふが三年位は直ぐですわ、明後日は東京へ歸るといふから明日はオハギ萩



餅を作つて喰はしましやう小供の頃はアダニ(随分)好きであつたが今は何うですか」と母はいふのであつた、「小供共も病氣もせずにごうか物に成つたからこんな目出度いことは無い」と異口同音にいはれたのである、「明朝は霜ですよう寒いから、ヨネコもう一つ布團を着せやうか」とて其次ぎの室に寐て居る余に母親は大きな聲でいはれたのである、余は死ぬまで此の家に居られたならと思つたのである、家は平和と慈愛の府である、此の平和と慈愛を捨てて行かねばならぬのも身に天職と目的があるからである、余をして唯消極的詩人たらしめれば一歩たりとも此の家より出ることが出来ぬのであらう

翌日になると明日は愈々出立するといふので、近隣の人々が訪問する、「米國に出稼にいて居る私の悴へ」とて米國とさへ云へば誰も一所に住居して居るものと考へて、一箇所より一箇所へ行くに一週間も汽車でかゝるといふことを知らずに種々なる事を依頼するものもある、「ドウカ此子は米國で學問がさせたいのです宜敷今日より頼みます」とて五ツか六ツになる子連れて来る人もある、此れを何卒米國まで持つていて下被たい私の園庭で出来たものだからとて柿を持つて来る人もある、無邪氣で同情ある田舎の人よ、幸に壯健で幸福なれ、余は再び無邪氣で同情なる皆様にお目にかゝるである、左様なら!

今夜は最後の晩といふので家で湯を立てた、毎晩立てるのであるが今夜は特別に澤山の湯を湯舟に沸かしたのであつた、余が湯に入つて居ると、姪の芳子が「叔父様、今晚ぎりだからよく洗つて出て頂戴とお祖母様がそういへ」といふのに、「今晚は垢を落さずに垢を取つておいて又直ぐ歸つて来て其の垢を落としますとお母様にいつて頂戴よ」といつたのである

夜に入つてから姪を連れて天王様へ参詣した、途中で下駄屋へいつて下駄を一足買った、外に用があつたから一足先きへ下駄を母親に托して出た、家へ歸へると母親は、「あのお方は何處の人だと下駄屋が聞いたら喜一さん、(隣家の忤で余より四ツ計年下である)が彼のお

方は米國より歸つてお出の人だといつた所が、ソウか彼のお錢がそ  
うですか、エライお人だといふ事ですが、そんなお方になら五厘所  
でない二十錢や三十錢損をしても宜い下駄をはいてもらひたいと云  
はれ、私の母といふことを知らなんだから」と得意顔に話された、  
母親は田舎流に一圓五錢といふ代價の五錢を子ギツたのであるから  
下駄屋はそう云つたのである  
余は明朝日本服で日本の下駄をはいて歸京するのである

(十一月八日稿)

○歌舞伎座を見る

昨日は抜刀決死隊が飛込むだといふし今日は又號外くと鈴を振つて歩く新聞賣を街上看るのを見て我が忠勇武烈なる兵士は元龜天正年間の武士の如く満洲の野で奮戦して居るのである、帽子と西洋服を着て居る明治の武士、彼等は所謂武士道なるものを實際に發揮して居るのである、而して余は今日歌舞伎座に於て武士の模型ともいふべき大星由良之助(余をして假名手本忠臣藏の名を用ひるを許せ)を見たのである、實に外では武士の風が満ちて居る時、内で忠臣の演劇を見たのである余の感激は少からずであつた、白状すれば余は外國

にあること十三年で所謂日本魂なるものが少くなつて居たのである、今日歸朝して再び武士道なる壯高なる風に當つて、余は復活したものである、余は好い時節に歸朝したといふことを感謝するのである。花は櫻木人は武士、謙退と沈黙、忍耐と勇奮、死と犠牲、名聞を嘉して貧を顧みざる武士道の説明を今日忠臣藏で今更の様に聞いたのである、余は八百藏、梅幸、羽左衛門の藝に感心したのでないのである、忠臣藏其物に感心したのである、若し茲に團菊左を存在せしめたらと思つたのである、(余は羽左衛門が老年になつて成熟して段藝に溢の付いて來らむを望むのである)、余が十三年前見たる故團十郎の由良之助と今日八百藏の由良之助を比較せぬのである、又余

は大なる満足を以て八百藏の藝を見たといふことを白状するのである、余は彼の由良之助を見て少くも由良之助其人の性格を思つて尊敬の念を起したのである、余は勘平切腹の段では男泣にサンム泣いたのである、余は歸朝以來泣いたのは二度より無いので一は母親を見て泣いたの今日忠臣蔵を見てのである、余は和田垣博士に多謝す博士は勘平切腹の段を英譯せられた余は其に依りて外國人をして讀ましたく思ふのである、(又新渡戸博士に多謝せざるを得ない博士の武士道は今回日露戦争に際して日本人の性質を十分に説明したのである)、憐れなるおかる、勘平は三十になるかならぬに切腹した、余も早や三十にならむとするが果して勘平程の忠信義膽あるや

を疑ひて耻入りたる次第である、寺岡平右衛門も男である、余は此の劇に依りて大なる教訓を得たのである、又興業者も之を演せしめたるは最も時を得たものと思ふ、果して東京市民は之に對して何むと思つて居るのであるか知らぬのである、余は不平の眼を以て棧敷を見たのである、棧敷に少からぬ人数の藝者が所謂紳士に連れられて見物して居るのを見た、藝者を責めるので無い紳士共は何故に藝者を連れて來ながら自分の妻君や娘共を同伴しないのであるか、日本の所謂紳士程汚穢極まる人間はあるまいと思ふ、藝者を連れて揚揚たるものの中には妻君が家に居て借金の返事に窮して居るものもあらうに

中幕に依りて武士道の説明を重ねられたのである、余をして團、菊、左は何處にあるかと繰返すを許せ、八百藏の辨慶は鳴もじない大鼓を無理に打つて音を出さすの感無いではなかつた、左團次の富樫をもふ一度見たいのである、近松門左衛門の名文には今更の様に感じたのである、奥ひで衝を木蔭ぞと頼むもあはれ山櫻花より外に知られじと兜巾まぶかなる面をヅラリと舞臺に見た時は少くも余は其壯大なる氣に撃たれたのである、『ヤア此な剛力上りの糟山伏め』と判官を踏倒す所何等高壯(サブライム)なる意味を含めるぞ、『名に掛つたる一筋は子々孫々まで解けざるぞ』とは所謂武士道の第一義であるのである、余は多謝す余は此の劇を見て、一段と自分の性格を確

に高めたのである、他人は知らず余は今日歌舞伎座の劇を見ること尚ほ神聖なる教訓を聞くと同じ態度を以つて見たのである、又之れを美術として見るも缺ける所があるまい、其不自然をなる責むる勿れ、新俳優は確に演劇をして現今なるものに接近せしめたのである、然し之を美術化するまでは遠いことであらふ、余は西洋畫に云はゞ厭いたものである、今日は日本の所謂江戸繪なるものを舞臺に於て見たのである、余は其保存を主張するものである、日本の舊演劇なるものは發達も其極に達して居るので一歩も變ずることが出来まい尚ほ能狂言の如きもので、改良するとなると則ち破壊を意味するのである、余は大なる興味と感心とを以て今日を歌舞伎座に於て費し

たのである

劇場を出ると、チリンノ、號外々々、日本明治の武士は滿洲の野に於て如何に武士道を実際に發揮しつつあるか、ヲイ一枚、イザ街上の電燈に依りて讀まじめよ

(十一月二十九日稿)

○ハーン氏未亡人との談話

去月二十六日の午後早稲田大學の内ヶ崎君が余を尋ねて來た時に余は手紙と詩集『東海より』一部を君よりハーン先生に與へて呉れと依頼したのは、ハーン先生は人に面會するのを非常に嫌ふといふことを承知して居る故余が直接出掛けるより君より様子を見て呉れ玉へといふ次第であつた、余は先生が米國に漂浪して居た時代に知つて居る人数名をよく知つて居る故、又は余は云はゞ先生と趣味のもの故、まさか面會せぬとはいはれまいと思つたのである、同日は内ヶ崎君と先生の雑談をして別れたが、今日で思へば余と内ヶ崎君

と先生の事を話して居た時は先生が臨終の時であつた  
 二十八日の朝、余は人に連れられて大隈伯を訪ねたが折悪しく外國  
 の客人が来た故、暫時待て居れといふことで、待つて居るのも面白  
 からずと早稻田大學を訪うて、若しや面會せられはすまいかと思つ  
 てハーン先生を尋ねた所が、受付が先生は亡くなられましたといつ  
 た、が、余は信ずることが出来なかつたのです  
 實は余は紐育の某雑誌へハーン先生に關する一文章を送る約束をし  
 て來て居るのですから是非面會したい、先生は米國では一種のミス  
 テリー(不可思議)と目されて居る、先生の歴史や其性格如何は知れて  
 居ないので、余の歸朝を幸に余に託したのである、余は先生が死亡

の報を聞いて一驚を喫した次第であつた  
 余は葬式に列せむが爲め市ヶ谷のコブ寺へ出掛けた、余は幾多の學  
 生や早稻田帝國兩大學の講師連を見受けて大に満足したのであつた、  
 常に先生を慕つて居る人々に送られて葬むられるのを先生の靈は満  
 足に思はれるであらふと思つた、奥様は御亭主を失ひ、子供達は親  
 愛なる父を失ひ、日本は英語の世界に對する最大にて最も勢力ある  
 スポークスマンを失つたのである  
 余は、先生が死なねばならぬならば先生は好期節に死なれたと思ふ、  
 なせなら先生は秋を愛せられました、日本の秋を愛せられた先生は  
 寂寞の詩人であつたのである先生自身はローンリネスの變形と云て

もよいのであつた先生は未だコブ寺で埋葬式を行はれて満足であらうと思つた、コブ寺は先生の愛せられた寺で、先生がコブ寺の近隣に居住せられたことのあつた時代に、コブ寺の墓地を研究せられて大篇『死の文學』を草せられて其著書『エキソチクス、アンド、レトロスペクティブス』に入れられた先生は其文中にいつた『余は其墓地を漂ふを好むそは其墓地にある大樹の薄明の壯なるを數世紀を経て積で積むだる沈黙を感じて人をして市町と其雑踏とを忘れて夢をタムとスペース以外に奔らしむるを得るが故ならむも、余が其墓地を愛するは美にて満ち大なる信仰の詩を其中に發見するが故なり』と、先生はコブ寺の墓地にある卒塔婆や戒名などを研究して翻譯して其

文中に入れられたが、今では先生も淨心院法興八雲居士となつて、他日また外國の文學者で第二のハーン先生が來たら先生の戒名は翻譯せられて第二の『死の文學』中に入れられることであらう。二日の日曜日、余は坪内博士を訪問した序に小泉夫人（ハーン先生の未亡人）を訪ねた所が、直に余は應接間に迎へられたのであつた、先生の家へいつたら其日本式なるのに驚くと坪内博士が余にいはれたが、實に驚くの外はなかつた、應接間には菊花が飾られて居た、庭園へ降りて先生の書齋の方へいつて見ると、先生の戒名を書いた卒塔婆が書齋に立てゝあつて果實の籠などが供へられて居た。余は奥様と三成重敬君梅博士の親戚とかで小泉家の萬事を世話して



居る人らしいと三人で先生の事共を話した、次に書く所は奥様と三成君との話である

「先生は遺言を残されなむだったので、お死になる一週間前に急に病氣がやつて来て非常に苦しうであつた、奥様が介抱しやうと思つて近かよられると彼處へ行つて自分に心配するなど云はれて、苦しき際に手紙之れは梅博士へ與へるものらしかつたのであるを書かれ、病氣も樂になつた時に今にも死ぬかと思つたと云はれたさうで、直るとすぐに書いた手紙を破つてしまはれた」

「自分の死ぬ時には必ず泣いては呉れるな骨髄か何かをやつて愉快に遊ぶで居てくれよといひました又自分が死むたら、常にいひます

には、火葬にして其灰を小き壺か何にかに入れて極寂しき所に埋めて呉れよといひました今度雜司ヶ谷に埋められる都合になつて満足して居りませう、夫は非常に雜司ヶ谷の鬼子母神の邊りや面影橋の邊りを好きました、私しなご其邊を散歩して鳥の音を聞いては面白くないかなごと申しました」

「先生の心に適ふ様に萬事を計ふ積りで、墓地へも先生が生前愛せられた草や木を此の庭園より移して植える積りで既に、一二本を雜司ヶ谷へ持つて行きました先生は竹や樅の樹が好であつた又和蘭陀ゲンダなどを愛しました、苔や小き雜草が敷き詰めて居るのを非常に喜ばれたので墓地へも一杯さういふものを敷き詰めやうと思つて

居るのですが、此處に疑問がある、先生は已に出來上つた庭園を破壊するのを嬉ばれまいかといふ議論があるので、他より買つた木などを墓地に植えるよりは自分の愛して居た木や草を持つて行つた方がよからうといふことに決したので、先生が木などを愛されたのは又特別なので、コブ寺は先生が久しき以前より往來せられた寺であるが、此頃のことでした、寺に一本高き杉の木があつたです、これを寺で切り倒した時に先生は自分の腕を切られたやうな心持をして斯かる無慈悲なことをするといふは言語同斷であるとして、それ以來は寺へも餘り行かれなかつたさうです、又此處から見えるが彼方の隣の屋根があります其屋根が以前は木の爲めに見えなかつた

さうです、隣の主人が其木を切つて賣らうとしたさうで切り初めました、先生がそれは善くないことだ、殊に其時には奥様が妊娠中で木を切る音が胸へ響くであらうとて大に心配せられました、して隣の主人に談判して金を遣るから切るのを中止せよと申込まれましたが隣の主人は約束済故爲方なしといふことであつたさうです、又竹の藪が此處から見えますな、人が來て竹を切りました其翌年に竹の子が歪むで出たのを其人に見せて、お前が竹の親を切つたからであるといはれたさうで、木などには非常に同情を持つて居られましたので』

『自分では何日何時死ぬか知れぬと思つて心配して居りました此の

子はまだ一歳になるかならぬのでありますが、此の子が出来ました時です自分では悦むで呉れませす子の顔を見ては涙ぐむで居りました自分は段々年を加へて来るのにこむな子が出来てはと申しました」

「先生は非常に蟲を愛されました、蟻などに大なる趣味を持つて居られた子供などを呼びよせては、蟻はお前より小さいけれど非常に精巧なものだなどと説明せられたさうです、蝶などもまた、先生の書かれたものゝ中に蝶に關する一文があります但し御覽になりましたらう、蛙なども先生が愛されたもので、先生の書齋のドリアはグラスです其のグラスへ蛙の子が來ました蛙の子が腹をペツタリとあてて居る様子が面白いといつて一日其書齋にこち籠つて人に其ドリア

を明けるのを禁じたことがあつたさうです又先生は楓樹に妙な蟲のたかつて居るのを發見しました其蟲は葉を食ふ蟲なので、其蟲を他の楓樹に移して葉を食ふのを見て樂まれたことがあつたさうです」

「夫は日本流が好きなので、食事ばかりは醫師の注意で三四年間は西洋食であつたが、其他は皆日本風でありました、常にすわつて居まして、私などがさぞ難澁でせうなごといふと、座わるのが勝手だといひまして三時間でも四時間でも座つて居りました子供共が洋服が着たいといひまして日本服がよく似合ふと申しまして、子供共は何せバ、は西洋のものが嫌いだらうと私に問ふことがありました、葬式の時でも日本服でやらうと思ひましたが皆様が洋服の

方が萬事都合がよからうといふので西洋服を着せました次第で、長男は一雄と申します次男は岩雄で三男は清と申します長男は英語も少々話します去年の秋長男を連れて米國へ行く積りでした所が病氣の爲め中止になりました、子供はアイの子でありますから寧ろ米國の方が萬事よからうといふので米國の學校へでも入れやうかと常にさう申して居りました

『先生の次ぎの本が完結にならぬ先に死なれまして残念の次第であります、其本には七夕の事や三月の節句の事などが書いてある様子です』

『夫は人に面會するのを非常に嫌いまして私は人様に斷はるに氣の毒でなりませんでした、種々様々の事を常に考へて居りまして一分間の隙が無いので、人に面會して居ると其考を亂されるのを嫌つたのでありませう學校へ行きましたも教員室へは参りませす直に教場へ出掛けまして、時間の放課には運動場を散歩して居るといふ工合で、何かといふとすぐに自分は變人であると思ふ申しました、夏温泉場へ行きますのにも人の行かぬ所へばかり行きまして人を見るのを非常に惱さがりまして、自分の愉快と思ふことは文章を作ることばかりで隙さへあれば筆を取つて居りました』

『先生が日本の材料を取られたのは、私なども助力をいたしましたが多くは奥様が助けられましたので先生は五十三で、アイヲニアン群

島中でラフカデヲといふ小島で産られたので其名を自分の名とし  
 たのださうです先生は非常に好きと嫌とがあつた人で、好きだとい  
 ふと非常に好きなので、一度嫌いだといふと如何なる人でも面會せ  
 られなかつた、近頃早稲田大學へ行かれました後は大分其性質が直  
 つて来た様子で、教員諸君とも往來して、坪内博士よりも日本の演  
 劇などの材料を得るといふ都合で大に面白く行きさうであつたのに  
 今回の不幸を見て私共は實に残念でたまりませむ次第です』  
 『皆様の御親切は墓場の下に難有く思つて居りませう私は何とお禮  
 の申様もありませむ』

(十月五日稿)

明治三十七年十二月十六日印刷

明治三十七年十二月十九日發行

歸朝の記

實價金四拾錢

著者 野口米次郎

發行者 和田むつ

東京市日本橋區堀田町二番地

印刷者 齋藤章達

東京市日本橋區堀田町二番地

發行所 春陽堂

東京市日本橋區堀田町二番地

印刷所 東京印刷株式會社



野口米次郎著

英米の十三年

『歸朝の記』に次いで弊堂またこの一篇を上梓すべきの舉あり。本書は氏が初めて旅装を調へて北米に航し、次いで英京に遊びたる十三年間に於て、諸家を訪問し、風物を見聞したる記録を悉く蒐集し、英文と言はず、邦文と言はず、年代により之を列ねたり。採つて以て之を座右に供へんには、さながら歐米の文界に身を置くが如く、氏が巧妙なる章句は、その細微なる觀察と共に、趣味津津々、全篇花のいろ／＼を以て飾り爲したるにさも似たり。

近刊豫告

## TRAGEDY.

The shadow of a lonely willow  
Swings  
Ghastly, ghastly ;  
The roads are lost  
In the hoary-haired mists of eve ;  
A strange green light in the distance  
Drifts  
As a wandering fay ;  
I hear a wild cry  
In the dark air,  
In the stream,  
In the stars.



## RIGHT AND LEFT.

The mountain green at my right :  
The sunlight yellow at my left :  
The laughing winds pass between.

The river white at my left :  
The flowers red at my right :  
The laughing girls go between.

The clouds sail away, at my right ;  
The birds flap down, at my left :  
The laughing moon appears between.

I turned left to the dale of poem ;  
I turned right to the forest of Love :  
But I hurry Home by the road between.



“ And our Selves bend underneath the weight of  
Life.

“ How hastily our eyes are turned toward decay,

“ While our feet strive on the Perfection road,

“ Smelling the odours of flowers unknown !

“ O boy, where is an eternal frame for man ?

“ And who is it, but himself, that steals his strength  
away ?

“ Tell me, O boy, how shall he charge

“ Against the Autumn blast fallen on his back ? ”

My innocent boy was asleep under the cricket's  
song.



## MY HEART.

Oh Lord, is it the reflection of my heart of fire ?

Is it, my Lord, the sun-set flashes of the Western  
sky ?

Oh Lord, is it the echo of my heart of unrest ?

Is it, my Lord, the cry of a sea breaking on the  
sand ?

Oh Lord, is it the voice of my sorrowful heart ?

Is it, my Lord, the wail of a wind seeking the  
road in the dark ?

Oh Lord, is it the dripping tears of my heart ?

Is it, my Lord, the rain carrying tragedy from the  
Heavens ?





## AN AUTUMN DIRGE.

I sat down, one night, with a book,  
(Book, Night and Solitude with me):  
A sudden voice toward the South and West  
swept on.

It began like the sigh of a breeze  
'Long the path of poesy and Love, under the  
moon,

And it grew to the stir of waves upon the shore:  
Then what a roar of breakers of the mad night,  
Amid the wind and rains with fire on tongue!

The Voice burst on the hanging bell:  
The pendants alarmed to the Voice.

It was like the soldiers' march,  
Their eyes set upon the enemy and stars,  
With no shout of orders in the air,  
But the stamp of the feet chanting Victory.

"Boy, what noise is that?" I said.

"Go forth, and see!"

"Sir, the moon shines, the 'Silver River' girdles  
the sky:

"Without, no sound of men is heard,  
"But only the murmur of trees and stars."

"Autumn! Autumn!" I cried.

"Is it thus, O boy, that Autumn comes?"

"Autumn, the frost-eyed, with ill heart!

"Autumn, season of Tragedy and mists,

"Autumn, season of ashen sky without clouds,  
(How my soul longs to sail in Poesy by the  
clouds!)

"Autumn, season of blasts and tears,

"Autumn, season of emptiness and dusts!

"Autumn comes close with icy breath,

"And falls on Life with a sudden shout.

"All the gowns of green of the forest and field

"Will be cast in the ruiner's face:

"Autumn, the executioner, solemn in black,

"With many-angled temper, and swords,

"Autumn, the Demon, with wings in the air of  
Death!

"How we loved Spring-days of birth and  
laughter!

"How sad is the hour when maturity passes!

"The roses and trees in gray season must die.

"A hundred cares pain our human hearts,

"Our desires mark wrinkles on our brows,

## JAPANESE EVENING.

My soul once ambitious when the sun rose,  
With the setting sun now has calmed down :  
For some time in sweet motionlessness I lay.  
O star, star with a silvery song,  
Let me count the number of thy shadows in my  
depth of heart !

I will be afloat far in the eve  
With the zephyr full of fancies of faery ;  
Yet, let me hurry back to our land,  
When the light is lit in houses and streets !  
Sweet twilight in our land ! Velvety shadows of  
the Heavens !

I will slowly walk along the streets,  
And peep into every house through the window-  
pane.

How my heart will leap seeing the children and  
mothers

Read the books of Beauty and Truth,  
In the odour of God and Life !

O sweet Home ! What April mists

Enwrap the souls to endless dream !  
You there the voice of the nightingale will hear :  
Nightingale ? Nay, voice of Love !



Shed no tear !  
Shed no tear !  
Dry thine eyes !  
Dry thine eyes !



## SPRING.

Spring,  
Spring in my Lover's eyes brooding upon my  
soul,  
Spring in her gait along the Love-road, the road  
to Heaven and my heart,  
Spring in her smile blossoming from Speechless-  
ness.  
Spring in her touch of hand, reviving my sleeping  
spirit,  
Spring,  
Spring in the song of the skylark,  
Spring in my poems,  
pring,  
Spring in the breath of the wind,  
Spring in the water-bubbles,  
Spring,  
Spring in the lily,  
Spring in the tree,  
Spring !



## PEACE

The tedious wheeling of night-Eternity! The shadowy peace mantles the world where Love and Dreams sleep in Infinitude.

O, new-born world of richest fantasy! The land and sea, moon and mortals wrap the Dimness about their breasts.

Ah, the world reposes with the mother-Solitude, under whose wings the stars and I harken to the sermon of Silence!



## JAPANESE CRADLE SONG.

Shed no tear!  
Shed no tear!  
Thy mother soon shall return from the moon,  
From the moon,  
From the home of Spring and Laughter,  
Carrying a bag of powder white for thy face,  
With branches of pearl-tree for thy hair,  
That all the angels shall be wild,  
Exclaiming, "Nippon ichi! Goranna!"  
Dry thine eyes!  
Dry thine eyes!  
Thy mother soon shall return from under the sea,  
From under the sea,  
From the home of honey and bliss,  
Carrying a sack of tea odorous with dews,  
(Thou shalt learn taste of tea next to Love)  
Which mother will steep in the purple haze,  
Under the cherry trees,  
By a singing river,  
And she will teach thee first steps  
Under the bluest sky.

### HAUTA.

Beneath the cherry blossoms sleeping  
I dream all the weary night  
That from the sky the snow comes creeping  
Oh, white !  
Yoi, yoi, yoiya sa.  
Ah Lord Love, 'twas not the snow  
But the flowers falling so.  
Yoi, yoi, yoiya sa.  
To-night the tree leaned low and said :  
“ My root shall pillow thy tired head,  
And my petals be thy bed.”  
Yoi, yoi yoiya sa.  
O Lord Love, how the night-wind sighs !  
Is it a song for a flower that dies ?  
May I not go with the wind that blows  
Away ?  
What does it dream, what does it say ?  
Who knows ?  
Yoi, yoi, yoiya sa.  
O Love ; Lord Love, by the silver-lipped stream  
I lie and I long and I dream, I dream.

Ah Love, Lord Love, it is hard to keep  
All one's dreams for sleep—  
O the pity to be but the maid who waits  
To win her joy from the jealous fates !  
Yoi, yoi yoiya sa.

ZONA GALE & YONE NOGUCHI.



In my praise over her beauty.  
She showered on me her rich smile  
And bliss : I wondered how I  
Could merit such a luxury.  
My happy footsteps around her  
Were those of an ecstatic priest  
In wonder, in worship, and in prayer :  
My flesh grew in her presence.  
I made a heavenly promise with her eyes :  
The beam of poem from her heart,  
Which others could not see,  
Sprang into my own bosom.  
Her each word was a passionate kiss,  
Her kiss made me understand what she could not  
speak,  
And her eyes made her meaning simple.  
When she softly folded her wings of smile,  
Her beauty was melancholy grey ;  
When she washed her hair in dewy fancy,  
Her laughter had a silvery sound :  
Her touch of hand was the touch of a star.  
She had innocent tact of love in each wink,  
Mighty valour in her light smile.  
God gathered the beauty  
From flowers and seas,  
And spread it in her face :

So every reflection of sea and flower  
I could trace in her face :  
Her face is an open book I cannot all read,  
But with suggestion I am content.



## O AKI SAN.

O Aki San and I walked into the Love valley,  
I with my face toward O Aki San,  
O Aki San with eyes upon the violets :  
I never knew how sweet is the air  
Till we walked arm in arm.  
We danced and sang in the valley,  
Under the wood of Life :  
I am of whitest breath,  
O Aki San of Spring beauty.  
'Twas her achievement of grace that she  
Thoughtlessly cast her eyelashes :  
Her charm rose higher when she  
Stopped confused, not finding the word  
Fit for her special thought.  
She sat herself down beside me,  
Excused from her dignity,  
And said that I must not think  
About her face alone :  
I know well that woman's humbling  
Is her pride in disguise.  
Her content grew to its full size

## CONTENTS.

	Page.
O Aki San ... ..	I
Hauta ... ..	4
Peace ... ..	6
Japanese Cradle Song ... ..	7
Spring ... ..	9
Japanese Evening ... ..	10
An Autumn Dirge ... ..	12
My Heart ... ..	15
Tragedy ... ..	16
Right and Left ... ..	17





It regards the Eternal Silence  
of the heavenly bodies, as the beauty  
of the flowery Earth with its  
revolving seasons, and its mysteries  
of Birth as of Death  
Good-bye with good wishes  
for the year which has just  
begun Believe me  
your very truly  
Lewis Morris

Mr. Lyone Noguchi  
151 Beacon Street

Dear Mr. NOGUCHI:

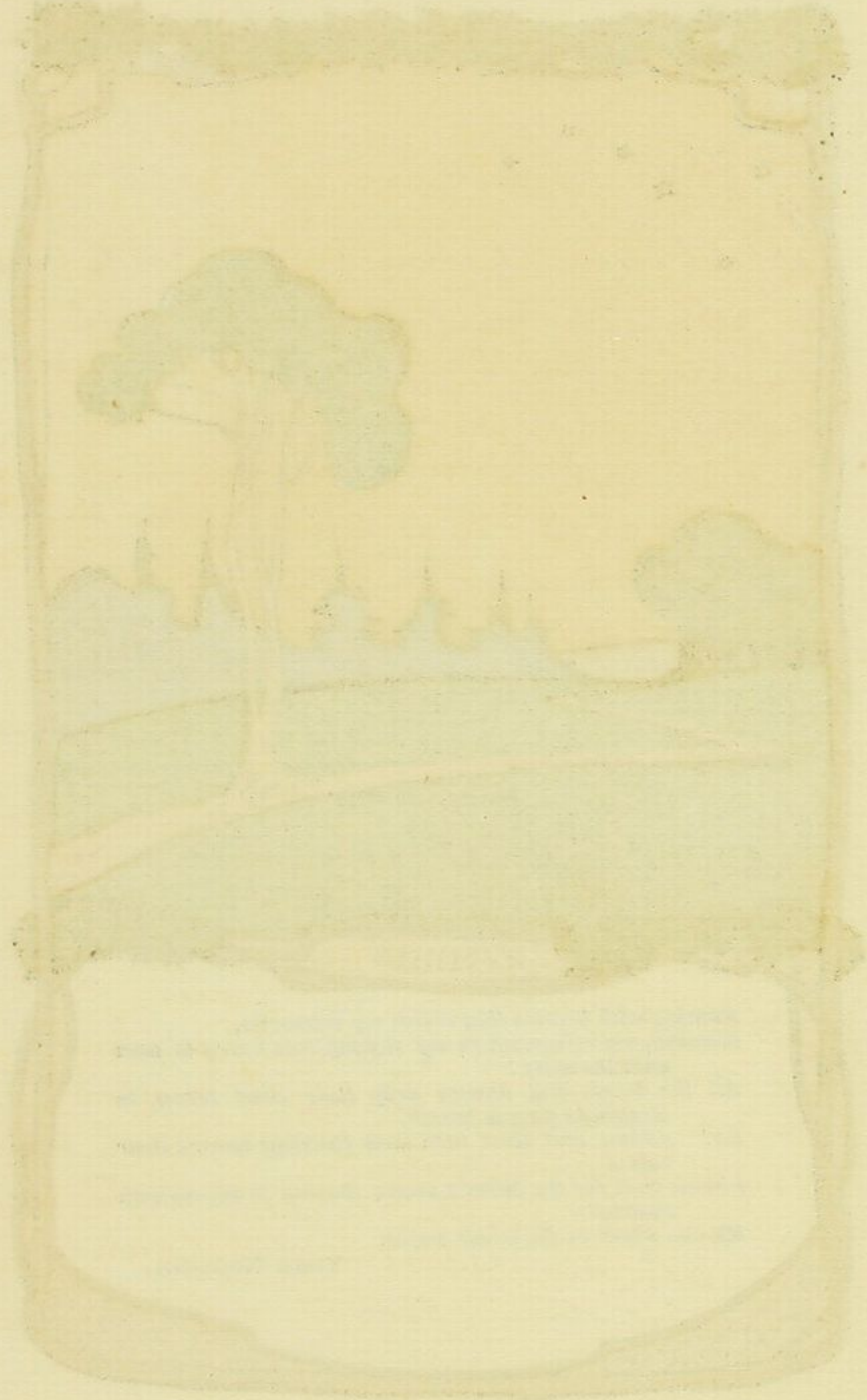
I have your pretty little book. It reminds me of one of Mr. Whistler the Impressionist on Art criticism, which also were on brown paper and with good effect. I have read the little book through and am much struck with your mastery of our western language. Like Whitman whom I admire greatly you are able to free yourself from the conventional fellows of rhythms. But you retain the rhythms, which make the real difference between prose and poetry in your language, and in yours, often the imagery is a little difficult for a Western reader to follow. But I am content to think that it is the Eastern view of natural objects, and appreciate the calm meditative spirit, with which it regards the Eternal Silence of the heavenly bodies, and the beauty of the flowery Earth with its revolving seasons, and its mysteries of Birth and of Death.

Good-bye, with good wishes for the year which has just begun.

Believe me,

your very truly

Lewis Morris.



PENRYN,

CARMARTHEN

Jan 16. 65

Dear Mr. Rogers

I have your pretty little book  
It reminds me of one of Mr  
Whistler's The Impressionist in Art  
criticism, which also was a  
paper and with good effect

I have read the little book through  
and am much struck with your  
mastery of our Western language  
like Whitman whom I admire  
greatly you are able to free yourself  
from the conventional fetters of  
rhyme. But you retain the  
rhythm, which makes the real  
difference between prose and poetry  
in your language as in yours. Often  
the imagery is a little difficult  
for a Western reader to follow  
But I am content to think that  
it is the Eastern view of natural  
objects, and appreciate the calm  
meditative spirit, which which



EVENING

*Evening with breezes that revive my memories,  
Evening, my refuge where my sighing eyes hurry to meet  
with the stars!  
All the leaves and flowers drop their tired brows in  
Evening's purple breath.  
Lo! Adams and Eves turn their footsteps toward their  
homes.  
I alone wait for the Moon's ascent longing to see my own  
shadow—  
My one wooer in the whole world.*

YONE NOGUCHI.

# KICHO NO KI

*BY*

**YONE NOGUCHI**

AUTHOR OF "FROM THE EASTERN SEA"  
AND "AMERICAN DIARY OF A  
JAPANESE GIRL."

TOKYO

**SHUNYO DO**

1904.

